公益社団法人日本文化財保護協会

紀要

目　次

「埋蔵文化財調査士」「同士補」の役割 …… 公益社団法人 日本文化財保護協会　会長　坂詰秀一　3

遺跡報告

礼井戸遺跡・高擂東遺跡（山形県天童市） …… ㈱三協技術　佐々木竜郎　4

堀米Ａ遺跡第３・４次調査（茨城県那珂郡東海村） …… ㈲毛野考古学研究所　淺間　陽　6

文京区目白台一丁目遺跡（東京都文京区） …… 大成エンジニアリング㈱　惟村忠志・勝田晶子　8

肥前佐賀藩鍋島家屋敷遺跡（東京都港区） …… ㈱四門　関根信夫　10

研究ノート

新座市栗原遺跡第１地点の局部磨製石器の研磨痕とその形成過程について …… ㈱東京航業研究所　諸星良一　14

東京都千代田区有楽町二丁目遺跡出土の木製品２点について …… ㈱武蔵文化財研究所　平田博之　16

特別講演会『考古学の力・文化財の力』ー地中の星を追いかけて

2018年3月10日㈯　日本大学文理学部百周年記念館

講演「地中の歴史を掘る」 …… 坂詰秀一　18

講演「縄文の思考」 …… 小林達雄　25

対談「小林先生に聞く・考古学の未来」 …… 小林達雄・坂詰秀一　36

第２号

2018. 8

「紀要」投稿規定

１．投稿資格

公益社団法人日本文化財保護協会の埋蔵文化財調査士・士補の資格を有する者。

２．募集原稿

次の３分類とします。

①遺跡報告

会員会社が業務として関わった遺跡の紹介。発掘調査報告書刊行済みの遺跡であること。※支援業務等で報告書作成を行っていない場合でも所管教育委員会の許可が得られれば投稿可とします。また、各地域の遺跡報告会で発表した内容も再掲できます。

②研究ノート

遺構・遺物の資料紹介や考察。小論考。

③論考

考古学に関連する内容の論考。

３．体裁

原稿の字数は、横２段組、25字×48行を基準とする。挿図・写真はカラー可。

文章表記は「である体」で執筆し、度量衡はcm・m・㎡等の記号、数量は算用数字（半角）を使用する。

①遺跡報告は２ページ、②研究ノートは２～４ページ、③論考は10ページ以内。

４．原稿締め切り等

紀要第３号は2019年度に刊行予定です。2019年度の年度初めに埋蔵文化財調査士・士補に通知し、投稿希望者を募ります。編集方針や体裁等の詳細は変更となる可能性もありますが、紀要第３号に向けての準備をしていただきたくお願いいたします。

公益社団法人日本文化財保護協会
紀要編集委員会

●題字　馳　浩

「埋蔵文化財調査士」「同士補」の役割

公益社団法人 日本文化財保護協会
会 長　坂 詰 秀 一

平成19年10月に認定された（公社）日本文化財保護協会の「埋蔵文化財調査士」「同士補」の“資格”は、その後、年ごとの試験の実施により、平成30年3月現在、有資格者は調査士延べ363名、同士補延べ310名を数えるにいたった。

この「資格制度」は、協会が「埋蔵文化財発掘調査に携わる者に必要な専門技術・技能を育成するために資格を付与」することを目的として設定された。「調査士・同士補及び発掘員」の３種が設けられ、調査士は「発掘調査から報告書作成まで一貫して責任を持って実施できる者」、士補は「発掘調査現場を統括し、人事管理・安全管理・工程管理を行いながら発掘調査を適切に実施できる者」と規定された。また、発掘員は「発掘調査現場で安全かつ適切に作業でき、経験の少ない作業員を指導できる者」とされた。

「士補」の受験資格が「大学で考古学等を専攻し…実務経験２年以上」と定められていることは、この「資格制度」が発掘調査の現場の体験－実務に力点が置かれていることを示している。さらに、継続教育（ＣＰＤ）制度の活用により不断の発掘調査に加え、その基底を形成する考古学的な日頃の研鑽を求めていることが明らかである。

かかる資格制度は、公益社団法人としての日本文化財保護協会が、独自の視点に立脚して実施しているユニークな制度である。したがって、この制度によって取得された「調査士」「同士補」の責任は、認定主体者としても決して軽視されるべきではないし、また、「調査士」「同士補」の多くが所属（勤務）している会社にとって、業務の責任を共有している。

『埋蔵文化財調査要覧』（年刊）収録の「公益社団法人日本文化財保護協会会員」項に「埋蔵文化財調査士」「同士補」の資格を有する社員の氏名が記載されていることは、会員会社の責任体制を明確化していることを示し、併せて「日本考古学協会」「日本文化財科学会」「日本旧石器学会」に所属している社員名が記載され、協会独自の資格と共に考古学分野の研究者を擁する会社の性格を具体的にあらわしている。他方、埋蔵文化財の発掘調査を関連業務から支援し協力する会員会社は、それぞれの経営形態を「業務内容」として記載し、①文化財部門、②それ以外の業務に分けている。

「埋蔵文化財調査士」「同士補」の資格を持つ社員が勤務する会社の多くが、埋蔵文化財の発掘調査を業務として特化していることを示し、その受注が可能であることを明示していると言えるであろう。したがって“資格認定者”は相応の責任を具備しているのである。

平成７年から９年にかけて高潮した「発掘資格者問題」は、官学民それぞれの立場で検討・模索が重ねられ、学会でのシンポジウムの開催、識者による意見の披瀝など関係各方面に問題提起がなされてきた。この問題の火付け役になった日本文化財保護協会の「資格」は、その後、順調に継続されてきた。一時、「誰が資格を付与するのか」「資格認定の問題作成組織は」などについての質疑は、底流で論議が重ねられているものの、表面的には鎮静化している。その要因の一つは、法人化された日本文化財保護協会の10年にわたる「資格制度」の実践に求めることが出来るであろう。

「埋蔵文化財調査士」「同士補」の資格は、埋蔵文化財行政と埋蔵文化財の対応について等閑視することの出来ない存在になりつつあり、認定主体者の責任は大きい。資格取得者にあってもＣＰＤの認識とその活用が必要であり、かつ不可欠な実践である。

「調査士」「同士補」の実践は、業務としての発掘調査報告書に総括されるが、協会が年１回行っている“優秀調査報告書表彰”は会員各社の「調査力」の成果の反映でもある。

「企業内研究者」と汎称されている「調査士」「同士補」にとって発掘調査の報告書は自己の「調査力」の発表の場として位置づけられると共に考古学的研究成果を披瀝する機会でもある。ただ、発掘・整理・研究・報告のプロセスが時間的な制約によって短縮せざるを得ない場合には、研究の成果は論文･著書として公にすることが求められよう。多くの場合、その発表は、学会誌上において果たされるであろうが、諸事情によって適えられないとき、協会として会員会社の「企業内研究者」の論文発表の場を設けることも必要であろう。『紀要』は、論文発表の場として有用に機能し「調査力」を示すバロメータとなるであろう。

「調査士」「同士補」の実践力は、報告書の刊行、論文の執筆・発表により、関係機関・識者間に喧伝され、併せて所属企業の「調査力」の具現として認識されることになる。それは“遺跡を発掘調査し記録化を果たす”任務を超えた“埋蔵文化財〈考古学的遺跡〉の発掘調査報告書”と“地中に残された歴史の背景を究める資料の記録”として史料化され伝えられる。

「企業内研究者」にとって自己の諸般の環境はともかく、その任務は決して軽いものではない。遺跡を発掘することは、遺跡をそれなりに破壊することであり、立場の差はあれ任務は重いことを改めて察することが肝要である。発掘したからには報告の作成と公表こそ不可欠の責務であること、言わずもがなである。

礼井戸遺跡・高擂東遺跡（山形県天童市）

㈱三協技術　調査部　佐々木竜郎

礼井戸遺跡・高擂（たかだま）東遺跡は、山形県天童市大字清池（しょうげ）字石名田地内に所在する縄文時代、奈良・平安時代の遺跡である。天童市は山形盆地の中央に位置し、市域は大きく東側の山地・丘陵部と西側の低地部に分けられるが、両遺跡は面白山を源流とする立谷川によって形成された立谷川扇状地右岸の扇状地先端部から約 300 m西の標高 104 m程の河間低地に立地する。この一帯は傾斜が緩くなる扇状地の外縁部や前縁部とも呼称され、西方向に手指状に流れる小河道により自然堤防状の微高地が形成されている。

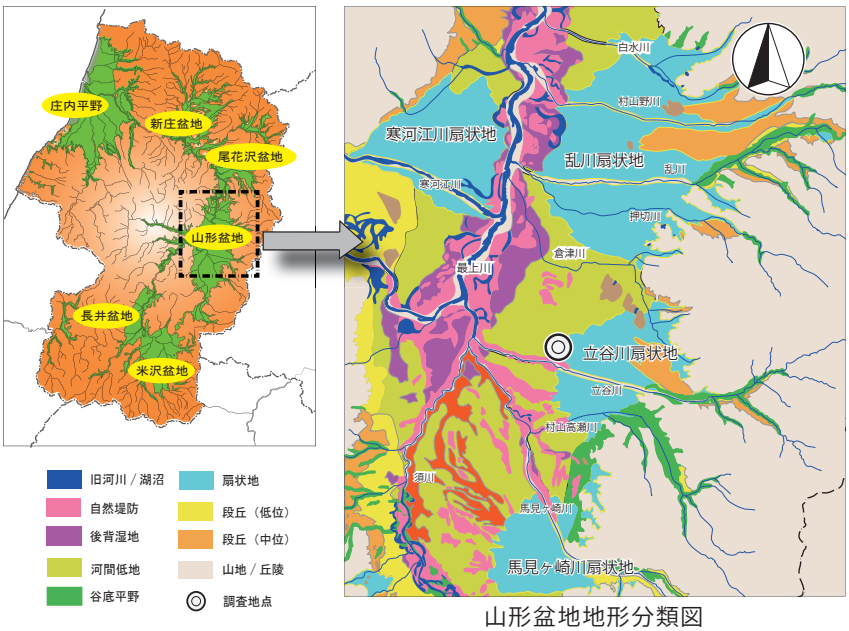
本調査は市道清池南小畑線の道路工事に伴い、平成 27 年 8 月 27 日から 12 月 24 日まで 2,950㎡を対象に実施した。調査地点が 2 つの遺跡の指定範囲が重複する部分を含むことから、便宜的に『礼井戸・高擂東遺跡』とし、発掘区を東西に貫く農道部分で分けて北区・南区として調査を行った。

本調査では、縄文時代および古代、中・近世の遺構と遺物が発見された。縄文時代の遺構は、低湿地部を除く北区全域と南区の北側に分布し、遺構は土坑 19 基、ピット (小穴)122 個、埋設土器 4 基、性格不明遺構 (不正形な落ち込み)63 基が確認された。また、調査区の南側では焼け面を伴う遺物包含層と小河川が検出され、縄文土器がまとまった状態で出土している。時期は大きく北区が縄文時代後期中葉～後葉、南区が後期前葉～中葉と捉えられる。古代、中・近世の遺構は南区の中央より南側にのみ分布しており、古代では平安時代の掘立柱建物跡 4 棟、柱列 1 条、ピット (小穴)238 個、土坑 5 基、性格不明遺構 5 基、溝跡 1 条、また中・近世では溝跡 1 条が検出されている。ここででは、縄文時代のピットと遺物包含層および小河川について取り上げたい。

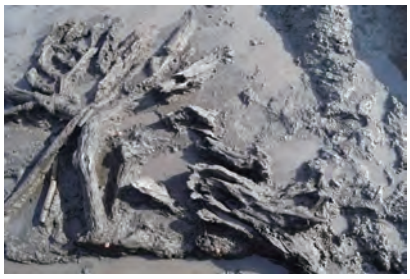
ピットは北区を中心に多数検出されたが、この中に柱材を残すピットが 6 個含まれていた。4 本の柱材の樹種同定を行ったところ全てクリ材で、内 1 本の年代測定結果は 3270 ± 30yrBP であり縄文時代後期中葉から後葉に相当する。これらの柱材が出土したピットの位置関係に建物等を構成するような規則性はみられないが、並列した状況が見てとれる。柱材はいずれも先端部が平坦に加工され、P290 出土の柱材は端部の炭化が顕著であり防腐処理が施されたと考えられる。低地遺跡や水辺遺構等で認められる材の多くは打ち込みによる杭状のものが多いが、このような柱の形状をもつものは少なく縄文時代の柱材が検出された事例としては貴重な資料といえよう。また、P254 からは赤漆の皮膜と漆液容器に用いられた小形土器が出土しており、遺跡内において漆製品の製作が集落内で行われていたことが示唆される。

また、南区北東部の遺物包含層では焼け面や多量の炭化物とともに縄文土器や石器のほか焼骨片 (獣骨・鳥骨等) やトチノキやオニグルミの殻など植物遺体が検出され、小河川の底面からは樹木 (サワグルミ) の根株も検出された。今回の調査区では住居跡等の居住にかかわる遺構は検出されておらず、火の使用を伴う捨て場の存在から居住域からやや離れた小河川沿いを選地した祭祀に関わる場の利用が想定される。

天童市・三協技術 2017『天童市礼井戸遺跡・天童市高擂東遺跡』

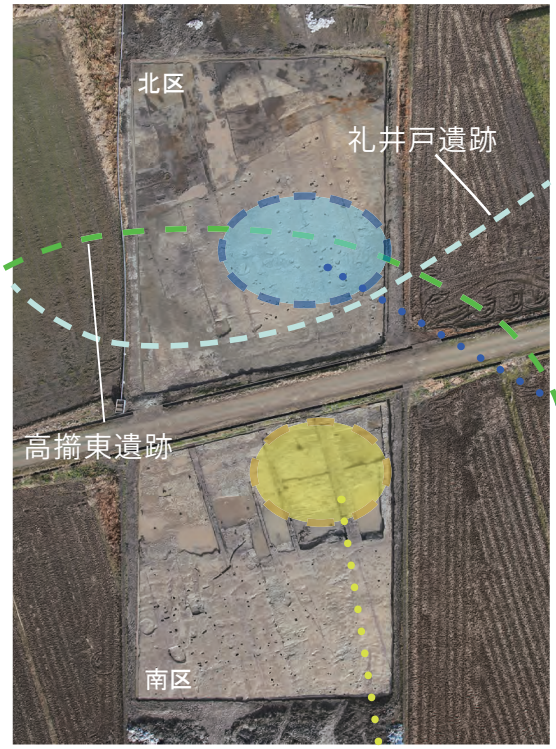


山形盆地地形分類図



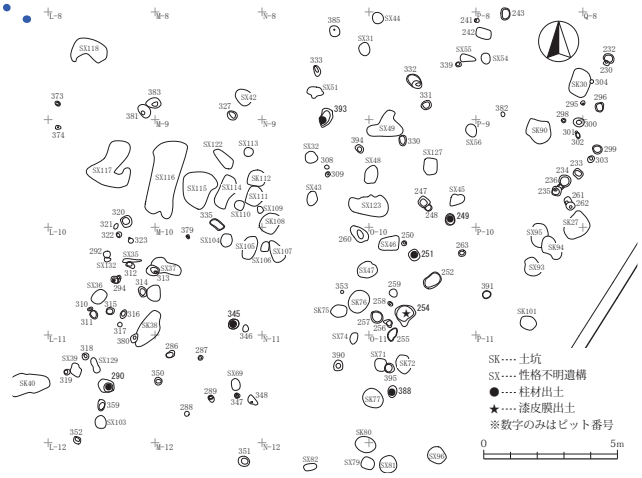
小河川根株検出状況

P290 柱材検出状況



調査区全景

調査区遠景（南西から）



北区南東部ピット配置図

南区縄文土器出土位置図

P254 出土漆付着土器

P254 出土漆皮膜

縄文時代後期土器群

P290 出土柱材

堀米（ほっこめ）Ａ遺跡第３・４次調査（茨城県那珂郡東海村）

㈲毛野考古学研究所　淺間陽

１．遺跡の概要

堀米Ａ遺跡は茨城県東海村大字照沼 930 ほかに所在する。本遺跡は縄文時代中期には内湾であった真崎浦を北側に臨む台地上に立地している（図１）。東海村立照沼小学校の新校舎建設事業に伴い、平成 22 年から平成 24 年にかけて４度の発掘調査が行なわれ、第１・２次調査では、地点貝塚を伴う縄文時代中期中葉の貯蔵穴群が検出され、大規模な縄文中期集落であることが判明した。また、土坑墓や埋没谷から５点のヒスイ製装身具が出土しており、茨城県内では常陸大宮市坪井上遺跡に次ぐ出土数である。こうした点から拠点的な性格を持つ集落と位置付けられた（大橋 2012・青木ほか 2012）。本稿では第３・４次調査について縄文時代を中心に報告する。

時代	調査次	調査面積	竪穴	掘立	柱穴列	土坑	溝	ピット	包含層	不明
縄文	1 次	4, 520 ㎡	3			471		123		3
	2 次	1, 360 ㎡	1			54		49		
	3 次	1, 300 ㎡			2	48		60		
	4 次	2, 456 ㎡	3			202		298	1	
古墳	1 次	同上	2							
中近世	1 次	同上				6	2	16		
	2 次	同上				5	4	3		
	4 次	同上		1		3	9	6		
	合計	9, 636 ㎡	9	1	2	789	15	555	1	3

表１　検出遺構数（中世土坑は火葬跡を含む）

２．調査成果

建物跡　竪穴建物跡は３棟を検出したが、調査対象地が大幅な削平を受けており、竪穴を確認したものは１例にすぎない。地床炉や石囲炉を伴い、５本ないし、６本主柱穴の配置から円形基調の竪穴建物と推定される。なお、長軸 10 ｍ前後の柱穴列（3 次 SA01・02 など）が複数検出され、これらは東北・北陸地方に発達する長方形の掘立柱建物跡や竪穴建物跡である可能性が高い（写真１）。

土坑　土坑の中で多数を占めるのは断面形が袋状・フラスコ状をなす貯蔵穴である。これらの中には埋没の過程で焼土が多量に検出されたり、硬化面が認められるなど貯蔵穴の多様な利用方法を示唆する事例が認められた。特に４次 SK057 では貯蔵穴が半埋没状態の時に墓として転用したと推定できる例が確認できた（図２）。

土器　第３・４次調査では阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期の縄文土器は大木８ａ式系の土器（写真３）が主体であり、図３-14・15 などのように福島県南部から栃木・茨城県北部に分布する「七郎内Ⅱ群土器」（図３-11・12）の顕著な影響が窺われた。また、遺構は検出されなかったものの、中期の遺構に混入する形で早期中葉の沈線文系土器が約 300 点検出された。これらの中にはコ字状やＶ字状の押引紋を特徴とする明神裏Ⅲ式（図３- ７～９）など東北地方南部の土器群が多く含まれる。

石器・石製品　既往の調査成果を加味した石器組成は磨石類が器種の判明した石器の中で主体を占め（56.7%）、打製石斧・磨製石斧・石皿・凹石・石錘（6 ～ 7%）、石鏃（3.2%）がそれに続く。このような石器組成は堅果類や根菜類を貯蔵したとされる袋状土坑の卓越する状況を反映しているとみられ、採集活動を主としつつ、狩猟・漁労活動を副次的に行っていたことが想定される。

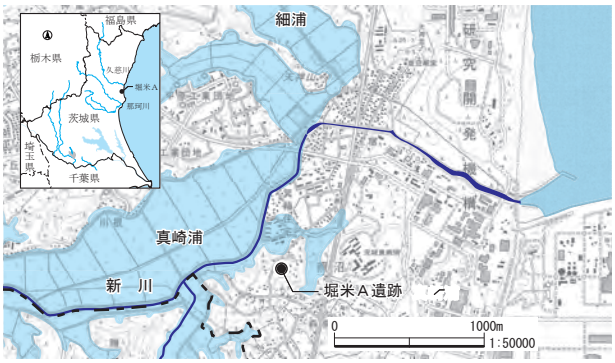


図１　遺跡の位置

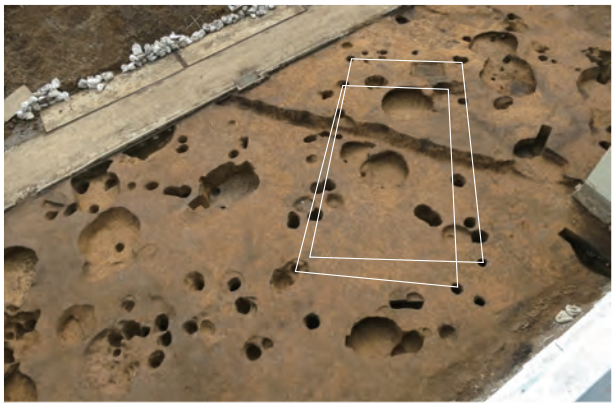
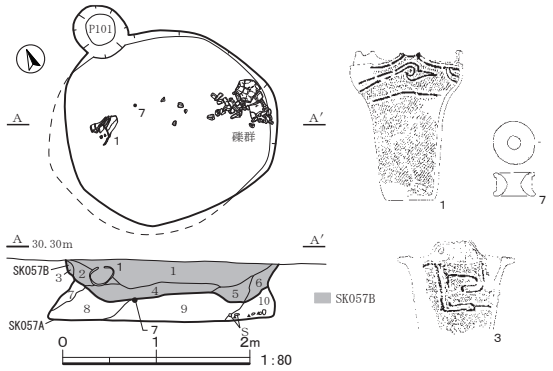


写真１　長方形建物跡と貯蔵穴群（4 次Ｂ区）



※SK057B 底面に土製耳飾（7）、埋葬後大木 8b 式期の深鉢（1）を横位副葬か。調査後重複が判明したため平面形は不明。SD057A からは大木 8a 式期の深鉢（3）と礫群。

図２　貯蔵穴の転用墓（4 次 SK057）

自然遺物　地点貝塚が６か所（1-4 次計 21）確認され、第１次調査と同様にヤマトシジミを積極的に捕獲していた状況が窺われた。既往の調査で確認されていないものはごく少量のマガキ、アワビ、ベンケイガイ、タマキガイ、ハマグリ、アマオブネガイ、サザエ、微小魚骨があり、ハマグリはすべて刃器として加工されていた。４次 SK035 では埋葬とみられるイヌの骨が検出されている。

３．堀米Ａ遺跡の意義

本遺跡は集落の約６割が調査され、集落構造が概ね判明した点が重要である。集落の主体となる時期は阿玉台Ⅲ式から加曽利ＥⅠ式期であり、加曽利ＥⅡ式期には急激に衰退する。日立市十王堂遺跡や茨城町宮後遺跡など後期まで継続する集落に比して短命と言える。また、第

４次調査区を中心に既往の調査では少なかった加曽利ＥⅠ式中段階の遺構が多数検出され、遺構分布の中心が北から南へ時期的に推移していくことが明らかになった。

集落構造は中央墓群・遺構希薄帯・貯蔵域・居住域・廃棄帯といった環状集落特有の重帯構造をなす可能性が高い（図３）。中央墓群が遺構希薄帯を挟んで明瞭に区分される一方で、貯蔵穴群と重畳して土坑墓や建物が形成され、空間利用の分化が明瞭でないことも特徴である。

以上のように、堀米Ａ遺跡は大木８ａ式系土器の卓越と長方形建物跡の存在から久慈川を介した福島県南部との濃密な交渉が想定され、ヒスイ製装身具や火炎系土器（図３-10）の存在から北陸地方をも射程に入れた交流が垣間見える拠点的な集落と評価することができよう。

引用・参考文献

大橋　生　2012『堀米Ａ遺跡（第１次調査）』 東海村教育委員会・株式会社地域文化財研究所／青木雄大ほか　2012『堀米Ａ遺跡（第２次調査）』 東海村教育委員会・大成エンジニアリング株式会社／淺間陽ほか　2013『堀米Ａ遺跡（第３・４次調査）』東海村教育委員会・有限会社毛野考古学研究所

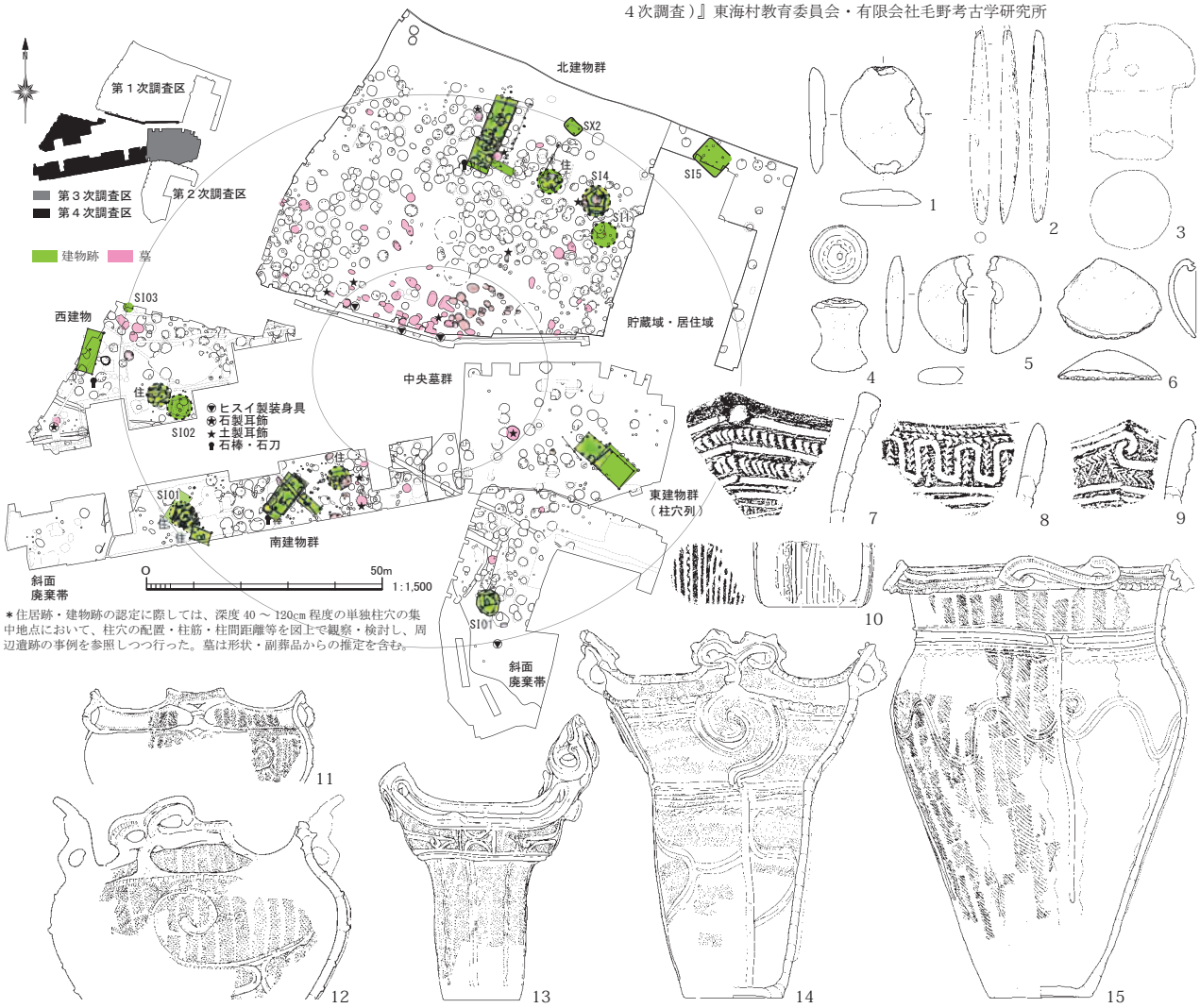


図３　調査区全体図と第３・４次調査の主な出土遺物（遺物は縮尺不同）

写真２　地点貝塚（４次 SK035）

写真３　３次 SK14･17 出土大木８ａ式系土器集合

文京区目白台一丁目遺跡

惟村忠志・勝田晶子（大成エンジニアリング㈱　埋蔵文化財調査部門）

１．調査に至る経緯

目白台一丁目遺跡は、文京区目白台一丁目18番14号地内に日本女子大学図書館建設に伴う事前調査として、平成28年８月から11月まで行われた（図１）。調査地は平成23年（2011）に日本女子大学附属豊明幼稚園地点で実施された立会調査により旧石器時代及び近世の遺跡が確認されていた。

本遺跡は、絵図によると江戸時代前期には高田村百姓地であったが、寛文元年（1661）に志摩鳥羽藩大名稲垣家（３万石・譜代）が幕府から下屋敷を拝領し、同時に抱屋敷を入手し、幕末まで存続した（図２）。その後は日本女子大学の敷地として利用され、現在に至っている。

２．遺跡の概要

調査地の南側は大学附属旧幼稚園の園舎解体工事に伴う撹乱が著しかったが、旧石器時代に形成された埋没谷が検出され、その最奥部は015号遺構（以下「遺構」を省略する。）により破壊されていたが、D-８グリッド付近と推測される。谷は東側のD-12 グリッド方向と、西側のB-12 グリッド方向に扇形に開き南に降っている。当該部分ではローム層が東側と西側に向かって崩落したと考えられる。この崩落したローム層上にⅡ層（黒ボク土）が厚さ約1.30ｍで堆積している。

検出された遺構は調査区の西側で南北に走る070号（溝）から東側に展開していた（図３）。調査区の中央部で東西―南北にＬ字状に走る027号（溝）から南では031号（生垣）005号（溝）が構築され、西側と東側に区画されていた。027号の西側では地下室、ごみ穴、採土坑など大型の施設と廃棄に関わる遺構が点在していた。027号の東側では遺構は希薄であったが、159号（地下室）、164号・179号（採土坑）が検出された。

出土遺物は、屋敷を拝領した直後に運び込まれたと考えられる初期伊万里様式の茶道具類、中国漳州窯の大皿片が出土した。また国元から搬入されたと考えられる東海系焙烙、釜が21基の遺構から出土した（図４）。食物残滓は貝類、魚骨、鳥骨などが出土した。

調査区と絵図を照合した結果、本遺跡は下屋敷内でも東側の御殿空間から西側に展開する空地空間であり、070号（溝）から東側は抱え屋敷地と考えられる。

３．調査の成果

墨書資料の中に19世紀前半に廃絶した075号から底部に「御茶屋所」と書かれた中皿が２点出土した（図５）。御茶屋所とは藩主が宿泊や休息のための施設のことである。瀬戸・美濃産の中皿は「馬の目皿」と称されるが、通常は皿が使用された場所を指すことが多い。「御茶屋所」は特定の場所ではなく、施設を指している。上屋敷は藩主が日常暮らしており道具類を使用する場所が厳密に決められていたようであるが、下屋敷には普段藩主は居住していない。本遺跡出土資料から考えられることは、日頃使用していない皿を藩主が来た時に使用したと推測されるのである。それは本屋敷が別荘として利用されていた証左といえよう。

073号（地下室）が廃絶した18世紀前半の稲垣家の藩主は四代重富であるが、若年寄となり正徳３年（1713）に摂津守に改めている。五代藩主昭賢の時の享保10年（1725）に志摩鳥羽藩に転封となり、伊勢神宮の内宮、外宮の警護役となる。015号からは多量の瓦と一緒に瓦質の西行法師立像が出土した（図６）。推定１ｍ内外になるが、西行は生前伊勢神宮に深く帰依したといわれており、その所縁により庭先にでも西行が立っていたのであろうか。興味深い遺物である。

昭賢には嗣子が無かったが、弟昭辰の長子、昭央を養子とし嫡としている。この昭央は享保12年（1727）に当該下屋敷で生まれ、後に六代藩主となる。18世紀代に廃絶した遺構からは暦文碗など17世紀末から18世紀代に製作された京焼の優品が出土している。京焼は女性に嗜好性が強いものであったとする指摘があるが、当該時期における稲垣家の正室は丹波園部藩小出信濃守秀貞の女（むすめ）である。丹波園部藩は現在の京都府船井郡園部町である。当該時期に廃絶した061号（ごみ穴）からは西日本に所領を有する大名屋敷から出土する傾向があるハモ属、キダイ属の魚骨が出土している。また18世紀後半に廃絶した159号からもキダイ属の魚骨が出土している。このような遺物の出土から18世紀前半期においては五代藩主の正室が少なからず本屋敷を訪れ生活した可能性が高い。

目白台一丁目遺跡の調査は、これまでに類例の少なかった江戸城から遠く離れた場所に立地する大名家下屋敷・抱屋敷地の貴重な調査事例となった。

出土遺物から下屋敷が別荘のような機能をし、さらに京焼に見られる女性好みの製品の出土や、六代藩主が誕生したり中屋敷のような機能を有していた時期があったことが、考古学的に確かめられたと考えられる。

＜参考文献＞

学校法人日本女子大学・大成エンジニアリング（株）2017『目白台一丁目遺跡』

図1　調査位置図

図2　安政6年(1859)『江戸切絵図(早稲田・高田馬場)』

図6　015号出土遺物　西行法師立像

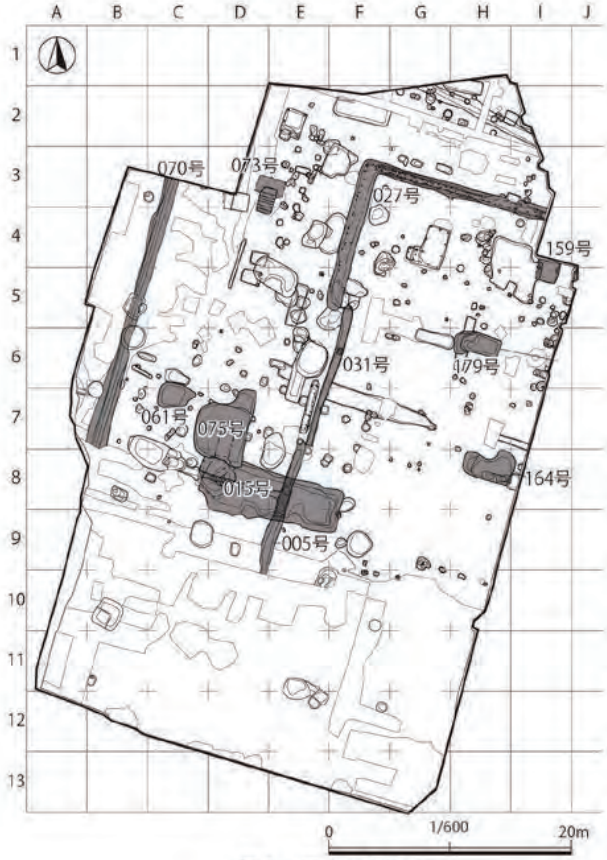


図3　調査区全体図

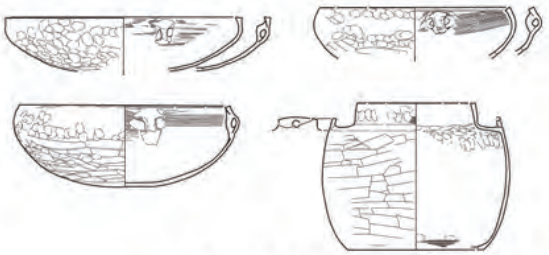


図4　出土東海系土器

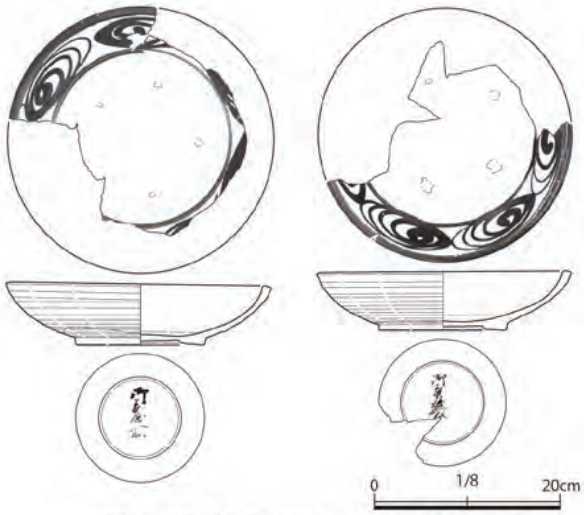


図5　075号遺構出土遺物　瀬戸・美濃産大皿

肥前佐賀藩鍋島家屋敷跡遺跡（東京都港区）

㈱四門　文化財事業部　関根信夫

遺跡の概要

調査地点は東京都港区虎ノ門二丁目２番４号に所在し、東京メトロ銀座線虎ノ門駅の南西約 400 m、都道 405 号線（葵坂）とアメリカ大使館前から南東に下る坂道（汐見坂）に挟まれる街区南東側に位置する。

本遺跡が所在する港区北東部は、武蔵野台地東端の淀橋台を侵食する開析谷の底部付近にあたり、東京低地と谷部入り口との境に位置する。当該地周辺の開析谷とそれにつらなる低地部は、いわゆる「日比谷入江」とよばれ、近世初期に江戸幕府により造成が行なわれていった土地であった。遺跡周辺は谷地の南崖部から底面にいたる微高地であったとみられ、基本層序で確認した自然堆積層にみる調査地点の旧地形は北西から南東へごく緩やかに傾斜する。現地表面の標高は８～９ｍを測る。

本遺跡は、『御府内沿革図書』や『寛永江戸全図』などによると、調査地点を含む街区南半部は 17 世紀前半に旗本花房家、17 世紀後半は譜代大名水野美作守の屋敷地であったが、元禄 11 年（1698）に江戸幕府により接収され、以後は佐賀藩鍋島家の中屋敷地となる。この屋敷地は天保期に行なわれた相対替えにより、街区全体を領する形となり、幕末を迎える。

発掘調査は平成 27 年 6 月 1 日から平成 28 年 5 月 7 日に約 3,084 ㎡を対象に実施した。

調査の概要

今回の調査範囲は屋敷地南東側に相当する地点である。調査区①～③は、鍋島家の詰人が居住したことが屋敷絵図に記載されている屋敷地南東隅部にあたる。発掘成果により、上下水道をはじめとする導水施設が多数検出され、その配置から長屋空間の存在がより明らかとなった。調査区④～⑤では、屋敷地内を東西に横断する形で大型の石組下水が約 54 ｍにわたって検出された。調査区⑦～⑩では、科学分析により６世紀中葉から８世紀後半の年代測定結果が得られた植物塊が断面観察と精査により調査区北東部を中心に広範囲で検出された。この植物塊は粗朶工法による盛土地業の痕跡と考えられ、調査地点周辺域を含む東京低地部において初の検出事例となった。

遺物では佐賀藩鍋島家に関係する陶磁器・土器、瓦などが盛土や遺構から多く出土した。鍋島藩窯製品と判明した磁器は破片資料を主体として 275 点が確認された。ほかにも文献資料により幕府用人へ献上した記載が残る『梅干壺』の胴部片や蓋が 14 点出土した。また、儀礼飲食用に幕府へ献上された『寒中土器』とよばれる灰白色を基調とした精製かわらけ片が 293 点出土しており、屋敷内では灯明具などの日常雑器として転用されている様相も認められた。

今回の発掘調査によって佐賀藩邸内の詰人空間の一端が明らかとなり、出土遺物から近年研究が進められている鍋島家例年献上品の内容的裏付けがなされた。

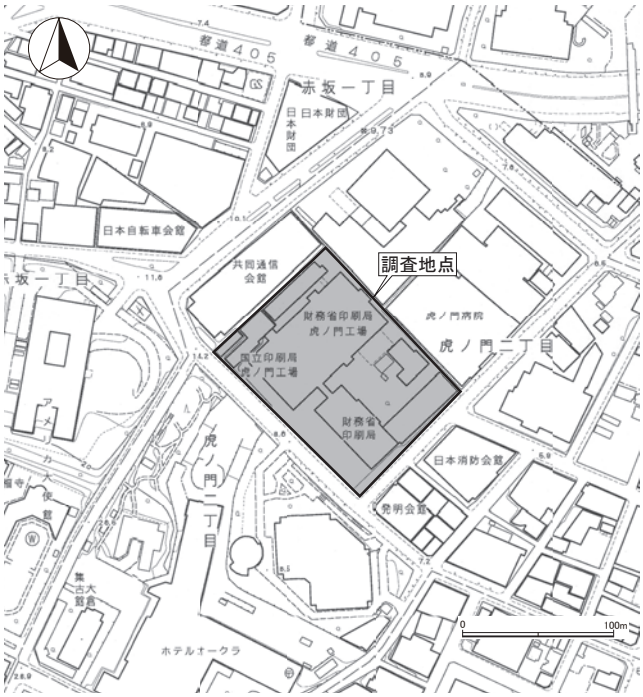
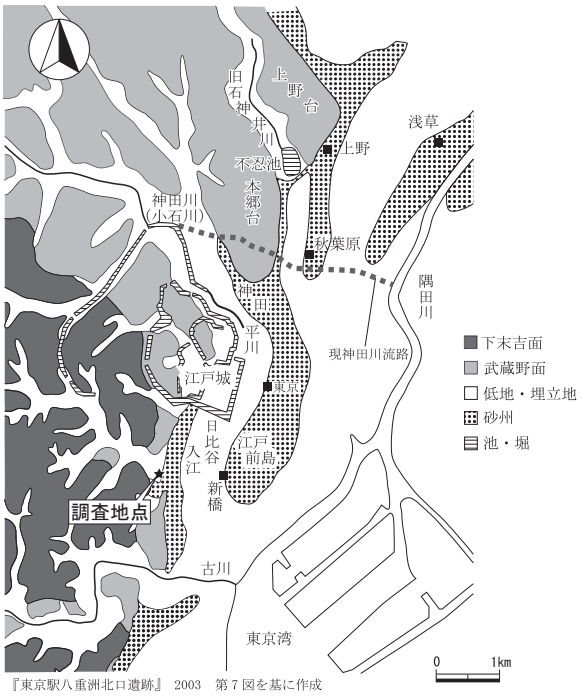


図１　調査地位置図



『東京駅八重洲北口遺跡』 2003　第７図を基に作成

図２　地形分類図

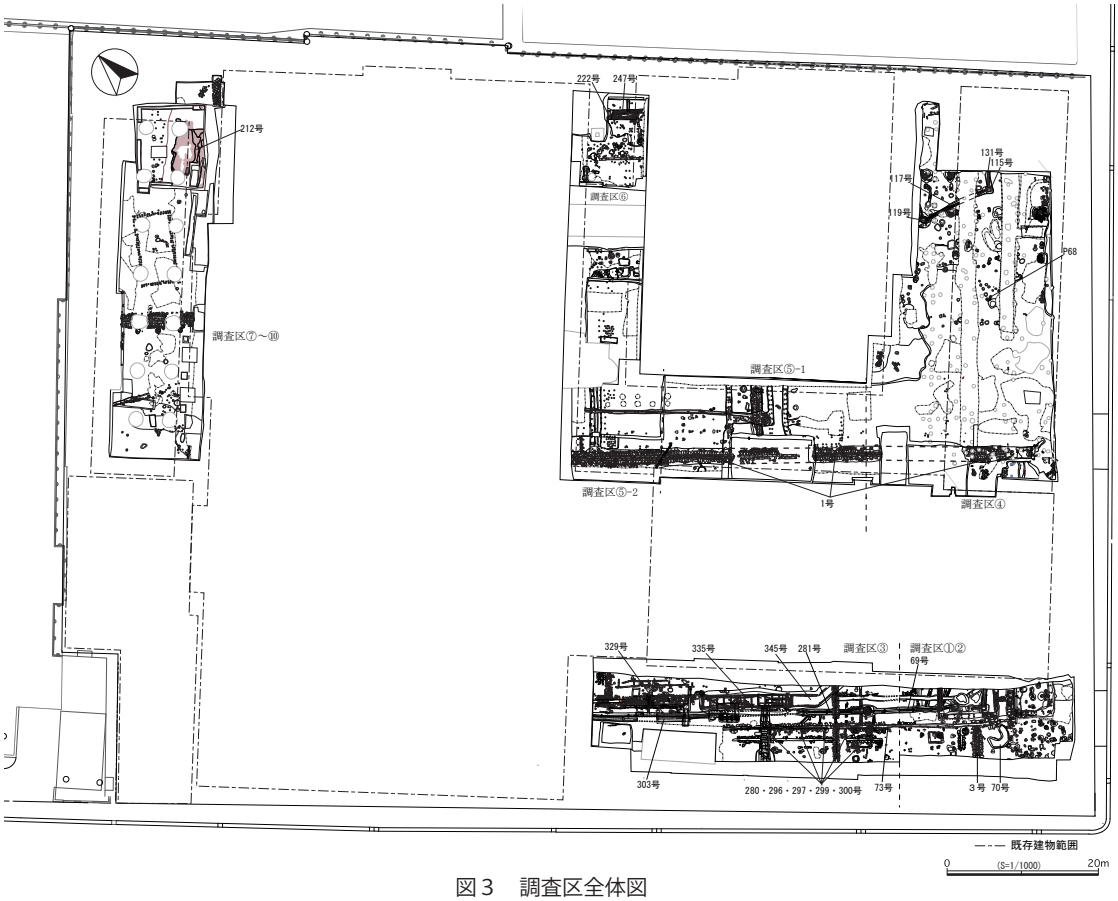


図３　調査区全体図

1．調査区③（１面目）完掘全景（南東から）

2．調査区③　329 号上水遺構（北西から）

3．調査区⑤- 1　１号石組下水遺構（南東から）

4．調査区⑦～⑩　212 号粗朶地業遺構（南から）

5．調査区内出土鍋島藩窯製品

6．調査区内出土精製かわらけ（寒中土器）

7．調査区内出土鍋島家家紋瓦

8．調査区内出土肥前産磁器（献上用梅干壺）

新座市栗原遺跡第１地点の局部磨製斧形石器の研磨痕とその形成過程について

㈱東京航業研究所　文化財調査課　諸星良一

序

埼玉県新座市栗原遺跡第１地点は、新座市の最南端の黒目川流域の武蔵野台地立川面右岸に位置する遺跡で、近世、縄文時代の遺構と遺物、後期旧石器時代の立川ローム層Ⅸ層段階の石器群が昨年の発掘調査で確認された（川畑ほか 2018）。後期旧石器時代の石器群は、立川ローム層中位～下位の層位から長軸 5.6 m×短軸 4.29 mの遺物集中地点を形成し、石器 53 点、礫、礫片 16 が出土した。石器は剥片製石器がチャート製 41 点、頁岩製１点で基部加工ナイフ形石器や石刃など、砂岩は 11 点で局部磨製斧形石器の調整剥片や敲石などに使用されている。

局部磨製斧形石器の調整剥片は、10 点検出されているが個体別に分類すると２個体に分類され、遺跡では少なくとも２個体の局部磨製斧形石器が搬入され、再加工されたことが確認された。この石材は、細粒緻密であり灰白色を呈し、加工痕以外に摩耗、線状痕や光沢がルーペで観察されたため、弊社所有のデジタル顕微鏡（キーエンス社 VHX-900）と筆者所有の落射照明付金属顕微鏡（オリンパス社 BHM）で低倍率から高倍率の表面観察を行い、他の石器と共に石器の機能的分析を痕跡学的に実践し、その成果を実測図、写真と共に報告書に掲載した。

その中で、１点の調整剥片・一括④（図１・写真１）の表面を観察したところ光沢以外に明瞭な線状痕が観察された。報告書作成当時は、局部磨製斧形石器の使用痕や研磨痕の研究データが皆無であったため、この線状痕の成因については解明できなかった。

本稿では、砂岩を素材とした石器を製作し、刃部の研磨実験サンプルを作成し、研磨回数ごとの研磨痕の特徴と形成過程を確認し、考古資料に残された痕跡との比較から、適用された石器技術が類推可能か検証したい。

刃部研磨の実験

粗粒石材の刃部の研磨の実験は、砂岩、ホルンフェルス製の石材を対象とし、石材の採集場所は栃木県栃木市星野遺跡Ｓ地点に隣接する寒沢の河原で採集し、石材を筆者が加工して刃部を作り、研磨は河原の砂岩を砥石として、水で濡らしながら刃部を密着させ、両手で石器の器体の角度を維持しながら研磨を行った。研磨は一往復を一単位として、砥石の研磨面が乾かないように注水しながら、できるだけ一定の速度でリズムを保ち、均一な力量で研磨を実施した。研磨単位時間は 100 往復で、平均１分ほどの所要時間である。この実験で作成したサンプルは、50 往復、100 ～ 1000 往復まで合計 11 種類の内、紙面の都合から６種類を本稿に掲載した。写真は刃部先端を上に向けて配置してある。

実験結果（図１・写真１～７）

今回の実験と観察では、刃部の研磨は基本的に 50 往復（写真２）から 100 往復（写真３）の間で研磨面に変化が見られた。この摩擦運動により形成された人工的な平滑面を研磨面と称する。さらに、研磨 100 往復になると研磨面が安定した面的構成を持つようになる。研磨 200 往復になるとさらに研磨面が広がり運動方向に線状痕が発達する。研磨 300 往復になると線状痕は目立たないが研磨面が面的に安定して形成される。研磨 400 往復（写真４）になると研磨面全体が白みを帯び線状痕がこれに重なるように形成される。また、300 往復から線状痕と共に部分的に白色の塊が形成され始める。研磨 600 往復（写真５）になると、部分的に線状痕が運動方向に太く白みを帯び彗星のような軌跡を示す。研磨 700 往復では、ほぼ研磨面全体に太く白い線状痕が運動方向に形成される。研磨 800 往復（写真６）になると、研磨面全体に白い線状痕がより幅広く広がり、複雑に重なる。研磨 900 往復になると研磨面が 800 往復と同様に発達せず、薄い白色の研磨面と白色の塊が形成される。さらに、研磨 1,000 往復（写真７）になると白い線状痕は弱まり、研磨 900 往復と同様な痕跡を残し、新たな研磨面の特徴を呈する。

結論

今回の研磨実験試料と栗原遺跡第１地点の一括④の調整剥片表面の線状痕の比較では、一括④は研磨面を形成し、線状痕が発達しており、少なくとも 100 往復以上の研磨により形成されたことが明白である。また、光沢が発達しているが、実験データの蓄積と比較が不足していることや線状痕の範囲が極小のため具体的な研磨加工と機能の同定は、未だ課題として残されている。今後も、局部磨製斧形石器に関する複製石器の研磨実験、使用実験、実資料の観察と実験試料との比較分析を行い、この石器の石器技術を解明したい。

謝辞

本稿を草するにあたり、新座市教育委員会文化財担当の川畑隼人氏、笹川紗希氏から資料掲載について快諾を賜った。岩宿博物館館長小菅将夫氏からは使用痕分析、実験について種々ご教示を賜った。研磨痕の写真撮影は田口陽祐氏に助力を賜った。また、本稿脱稿直後、Jenny L.Adams 博士より、筆者の取り組みに有益なご意見を賜り、著書を頂戴した。末筆ではあるが記して感謝申し上げたい。

参考文献

川畑隼人・笹川紗希・宅間清公・諸星良一 2018『新座市栗原遺跡第１地点発掘調査報告書』新座市教育委員会

Adams, J. L. 2014 “Ground stone use-wear analysis: a review of terminology and experimental methods.” Journal of Archaeological Science 48, pp129-138.

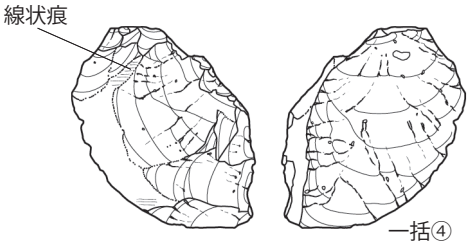


図１　栗原遺跡第１地点・一括④・砂岩製局部磨製斧形石器調整剥片

写真１　一括④・砂岩製局部磨製斧形石器調整剥片の線状痕（100 倍）

写真２　砂岩サンプル・研磨回数 50 往復（25 倍）

写真３　砂岩サンプル・研磨回数 100 往復（25 倍）

写真４　砂岩サンプル・研磨回数 400 往復（25 倍）

写真５　砂岩サンプル・研磨回数 600 往復（25 倍）

写真６　砂岩サンプル・研磨回数 800 往復（25 倍）

写真７　砂岩サンプル・研磨回数 1,000 往復　（25 倍）

東京都千代田区有楽町二丁目遺跡出土の木製品 2 点について

㈱武蔵文化財研究所　調査研究部　平田博之

1.　はじめに

有楽町二丁目遺跡は、JR有楽町駅の南東約 50m に位置し、現在は複合商業施設「有楽町イトシア」が所在している。本遺跡地は東京都指定旧跡の「南町奉行所跡」としても知られ、平成 17 年(2005)に実施された発掘調査では、南町奉行所の存在を考古学的に示す遺構や遺物を数多く検出した。

今回紹介する資料は、本遺跡出土の木製品 2 点(以下、当該資料)である(**写真 1**)。既刊報告書(武蔵文化財研究所 2006『有楽町二丁目遺跡』)内では性格不明であったが、その種別・用途について推測を提示し得ると考えた。以下、絵画資料等を交えながら、当該資料について考察してみたい。

2.　当該資料の概要と特徴

当該資料は、本遺跡検出遺構の S242 から出土した。S242 は大型の木組地下室(穴蔵)で、遺構の帰属時期は、出土遺物の年代から 18 世紀前葉頃(1730 年代以降)に比定されている。遺物中に「大岡越前守」と墨書された木札が共伴することから、大岡忠相(奉行在任　1717～1736)在任中、もしくは退任後まもなくに廃棄された遺構と捉えられる。

当該資料は地下室内から陶磁器・土器類、木製品などとともに一括廃棄された状態で出土した(**図 1**)。 2 点の形状はスペード形で、板目材から切り出されている。法量はほぼ同一で、長さ約 27 ㎝(9 寸)、幅約 14 ㎝(4.5 寸)、厚みは約 1 ㎝を測る。また、表面には黒漆が限定的に施され、漆の有無から表裏面が存在するように見える。漆下や白木の部分には、研磨などの調整は特に見られない。また柄状の部分を除く側面には、銅製の鋲(径約 0.5 ㎝)がほぼ等間隔に打たれ、資料の内 1　点の中央部付近には、1 点の鋲(径約 1 ㎝)と長方形の小穴が穿たれている。

当該資料 2 点は、その特異な形状から出土した当初より注目され、同様の出土例や類品を都内の江戸遺跡を中心に求めたが、管見の限り見付けることは適わなかった。

3.　当該資料の性格　－種別と用途について－

次に、当該資料に類似するものを出土資料以外に見出せたため、そのいくつかを提示し、当該資料の種別と用途を推測してみたい。

写真 2 は江戸時代(詳細時期は不明)に描かれた絵巻『大槌金澤金山之圖』(部分)である。「大槌金澤」は現在の岩手県上閉伊郡大槌町金沢地区を指し、江戸期に鉱業開発が盛んであった地である。絵巻は金山での作業を詳細に伝えるが、図中、「手鞴(てふいご)」を用いて金を精製する場面と、その形状や法量が記された箇所が見て取れる。鞴(ふいご)は蛇腹が付いた手持ちのもので、柄を持ち蛇腹を開閉することで火鉢に送風し、火力を強めている。法量は当該資料に比べかなり大きいが、板材の形状が似る。**図 2** は、時代が下って大正期の電車整備に関わる機器類を扱った書籍に紹介される、「革製手吹子」である。外観は木製、蛇腹が革製と見られ、狭長な送風口が付いている。その形状や、蛇腹を固定する鋲状の留具などに当該資料との共通点が見出せる。

鞴(吹子)とは、一般的に「金属やガラスなどの製錬、加工用に使う簡単な送風装置」(小学館『日本大百科全書』) とされ、強火力を必要とする際の必須装置であった。その種類や形状は時代や用途によって様々で、動物の皮で作った手持ちの“皮吹子(かわふいご)”、中世～近世期、特に中国地方のたたら製鉄において広く使用された大型装置である“踏鞴(ふみふいご)”や“天秤鞴”、鍛冶に利用されることの多い箱形の“吹差鞴(ふきさしふいご)”などが主として挙げられる。また以上の用途とは異なり、手持ち鞴の送風口にラッパを付け霧笛を鳴らす“霧笛号角”という船舶道具も存在する。

当該資料には蛇腹や送風口などが欠如しているため、鞴と断定するには根拠に欠けるが、形状の特徴などから、本来一具であった手持ちの鞴である可能性が高いと考えられる。帰属遺構や共伴遺物を含め、本遺跡には鍛冶などの金属加工に直接関連する要素は認められないが、小振りで漆塗りという、やや瀟洒な印象を受ける製品であるということを考慮すると、当該資料は(室内での採暖や調理に用いられた)火鉢・焜炉類の「火熾し」を目的とした鞴ではないか、と推測される。事実、共伴遺物中には土器五徳や風口、鉄製目皿などの焜炉部品が含まれており、関連が想定される(**図 1**)。

4.　おわりに

今回、当該資料について、その種別は鞴で、用途は火鉢・焜炉類の火熾し用と推察した。

羽口や鉄滓、鉄床など、遺存率の良い冶金・鍛冶関連の遺物は全国の生産遺跡などで多数確認されているが、鞴本体の出土事例は少ないと考えられる。今後、遺跡の性格に拘わらず報告例が増加し、文献・絵画資料なども活用することで、本稿では触れることができなかった当該資料の形状の起源や鞴の出土傾向など、多くの疑問が明らかになることを願い、以後も関連事項に注視していきたい。

【謝辞】 本稿をまとめるにあたりまして、以下の皆様に多大なるご教授とご協力、資料提供等を賜りました。記して拝謝申し上げます(順不同、敬称略)。
相場峻　穴澤義功　小村滴水　中山経一　三島知美
千代田区地域振興部文化振興課文化財係　和鋼博物館　早稲田大学図書館

写真 1　S242 出土　木製品 2 点

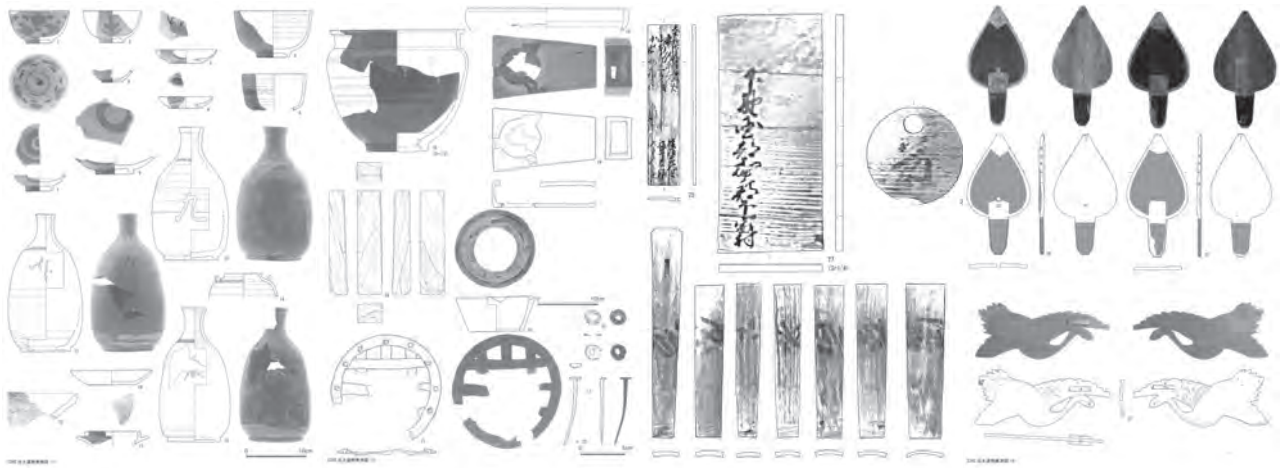


図 1　S242 出土遺物（一部除く）

写真 2『大槌金澤金山之圖』（早稲田大学図書館蔵）にみる「手鞴」

図 2　大正期の「革製手吹子」（東京市電気局乗務員教習所 1923『電車機械器具図解』より引用）

図 3　小型の鞴
（井沢省吾 2016『エピソードで読む日本の化学の歴史』秀和システム社より引用）

写真 3　当該資料実測図から復元した鞴

講演「地中の歴史を掘る」

坂詰秀一

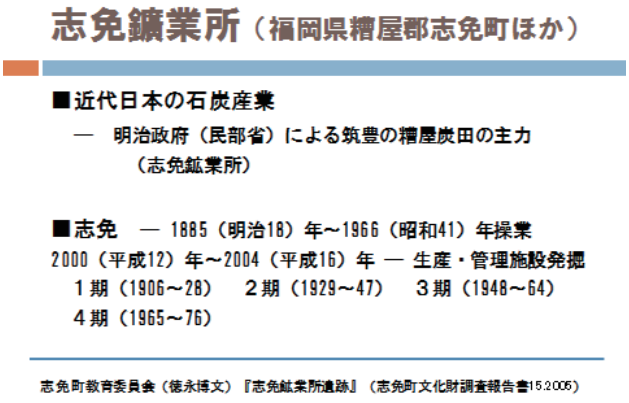
ただ今ご紹介にあずかりました坂詰です。本日は、私が小林先生の講演の前座をさせていただきます。どういうお話を申し上げていいか迷ったのですが、「地中の歴史を掘る」としました。テーマが「地中の星を追いかけて」ですので、地中の歴史を掘る、とさせて頂きました。

考古学の場合、「地中の星」という言葉は使いませんが、先ほど司会の方から紹介がありましたように、そのテーマに沿ってお話を申し上げたいと思います。考古学で最近対象としているのは地中だけではないですね、水中もかなり取り上げられています。地中という言葉の中に水中も入れてお話を申し上げたいと思います。現在、日本で文化庁の尽力で水中遺跡の調査が進んでまいりました。現在、200 箇所以上の遺跡が登録されております。

本日、特に私がご紹介したいと思いましたのは、その話の順序ですが、考古学ですと旧石器時代からはじまって、だんだん下がっていくのですね。私のは、倒叙法と言いますか、現代から過去にさかのぼってみております。倒叙手法と言います。探偵小説で犯人の側に立って追いかける手法だと思います。その手法をもって歴史を考えていく。今日のお話も新しい時代から古い時代、それも文献史料が存在する時代に限定いたしまして例となる資料を取り上げました。8 つの遺跡についてお話したいと思います。限られた時間ですから、私の最近注目している、気がついているものを通して、お話し申し上げたいと思います。したがって近代、近世、中世、古代それぞれ 2 つずつ事例を出したいと思います。そして、倒叙法でお話を進めたいと思います。

考古学界で戦前から戦後にかけて活躍されました酒詰仲男という先生がおられました。貝塚の研究で有名な先生ですが、その方が戦後すぐに出版された『考古学辞典』(1951)があります。日本で最初に出た考古学の辞典ですが、「序文」「考古学者とはシャベルを持った哲学者である」と書いてあります。これが戦後、考古学をやっている我々にとって考古学と哲学と、一体何の関係があるのかなと話題になったことがありました。今日は考古哲学についての小林先生のお話もありますから、そのようなことも考えながら各時代に 2 つずつ例をとりながら、現在、考古学の方で、日本考古学の動きをどう考えていったらいいのだろうかという問題にも追っていきたいと思ったわけです。

最初に取り上げますのは、志免鑛業所です。ご承知の方も多いと思いますが、近代日本の出発点となったのは石炭産業です。従来はこういう時代について考古学はノータッチだったわけですが、近代日本の石炭鉱業を代表する遺跡の調査がされました。明治政府が非常に力を入れた、この志免鑛業所は海軍を中心に石炭を生産した所として有名です。この調査は、志免町教育委員会の徳永博文さんが中心となり発掘が行われました。この調査に対して町の人々からそんな新しい時代の発掘を何故やるのかという問題も出たようですが、徳永さんが頑張り、その結果いくつか生産が変遷していくことがわかりました。その調査が報告書として出版されました。日本の考古学の中でも明治時代の考古学を考える場合には、近代日本産業の原点である志免鑛業所が注目されるのではないかと思います。



次は、「久須保水道」です。現在、明治 150 年が注目されています。明治 150 年は考古学にとって無縁だろうと言われているのですが、実はこの水道は日本海海戦に重要な役割を果たした水道です。この水道があったために海戦に有利な戦術が展開したという記念すべき水道です。ところが、これは今ほとんど顧みられていないんですね。対馬を縦断しているこの水道は大きな役割を持つ水道です。明治 3 年に開削されました。昭和 49 年に一部拡幅されたんですが、明治 3 年にできました時には長さ 300m、幅 22m で朝鮮海峡と対馬海峡を結び対馬を縦断したんですね。日露戦争が開戦される 5 年前に日本海軍が水雷戦の場合にはどうしても水路を作る必要があると考えたのです。この水路があったために日本海海戦 2 日目にこの水路が使われました。この水道は考古学の対象になるのではないかと、読売新聞の矢澤高太郎さんが明治時代の史跡として取り上げました。水道の跡というのも将来考古学の対象

久須保水道（長崎県対馬市）

■1900（明治３）年開削〈1974（昭和49）年拡幅〉

規模
- 長さ　約300m
- 幅　約 22m
- 水深　約 3m

西の朝鮮海峡と東の対馬海峡を結ぶ海路

■日本海海戦〈1905（明治38）年５月27日〉

矢澤高太郎『日露戦争史跡を歩く』（読売ぶっくれっど50.2004）

（岩佐　譲　撮影）
矢澤高太郎『日露戦争史跡を歩く』

井伊直弼墓所（東京都世田谷区・豪徳寺）

■井伊直弼墓所

〈1922（大正11）年９月「東京府史跡」1952（昭和27）年４月「東京都史跡」―「東京都旧跡」―として指定〉

彦根藩井伊家墓所
- 豪徳寺「彦根藩主井伊家墓所」（東京都世田谷区）
- 清涼寺「彦根藩井伊家墓所」（滋賀県彦根市）
- 永源寺「彦根藩井伊家墓所」（滋賀県東近江市）

2008（平成20）年３月28日「国史跡」

■2009（平成21）年11月～2010（平成22）年３月
保全調査「宗観院殿正四位上前羽林中郎將柳暁覚翁大居士」
■江戸幕府大老井伊直弼（1815～1860）
1860（万延元）年３月３日　桜田事変　４月10日 豪徳寺に埋葬
天寧寺（彦根市里根　井伊直中 ―直弼の父― 建立）に「大老供養塔」

宗観院墓塔　　宗観院墓 地下構造

■「桜田門外で直弼の流した血が春雪を染めて滲み込んだ土は、四斗樽四杯につめて彦根に送られ、父直中が創建した犬上郡里根村の天寧寺に埋められた」（吉田常吉『井伊直弼』人物選書. 1963）

世田谷区教育委員会『豪徳寺井伊家墓所調査報告書』（2012）
坂詰秀一『歴史時代を掘る』（市民の考古学10.2013、同『考古遍歴 鳴神録』2013）

になる、一般的にはあまり取り上げられていませんが、日露戦争に伴う戦跡として考古学で注目すべきものだと思います。戦跡考古学と言いますと、第二次世界大戦の戦跡ですが、例えば日露戦争のものも、私は対象とすべきではないかと考えているわけです。

近世になりますと、いくつも例がありますが、ここで取り上げましたのは、「井伊直弼墓所」です。井伊直弼墓所、皆さんご承知のように、井伊直弼は桜田門外の変で暗殺され、江戸の豪徳寺に埋められたと言われております。ところがこの豪徳寺の直弼の墓所を調査してみますと、実は遺骸が入っていないということがわかりました。改修に伴って世田谷区が掘ったのですが、2m近く掘っても出てこない。井伊直弼の遺骸が埋まっていないと言っていいのではないか。ではどこにあるのだろうか？これは私が勝手に考えました。吉田常吉『井伊直弼』(1963)に「桜田門外で直弼の流した血が春雪を染めて滲み込んだ土は、四斗樽四杯につめて彦根に送った」とあります。おそらく、彦根の天寧寺の直弼供養塔に収められているのではないか。そこが調査できればと思っておりますが実現することは不可能でしょう。国の史跡にまで指定された有名な政治家の遺骸が入れられたとされている墓が、実際には何も入っていない、幕末の政治状勢の裏を考えていくためにも重要な一つの材料になるのではないかと思っています。

もう一つご紹介したいと思うのが、最近注目されているイタリア人宣教師のシドッチ神父のお墓ですが、このお墓はキリシタン屋敷の遺跡から出てきました。この報告はご存じの方もいると思いますが、『文京区切支丹屋敷』(2016)に載っております。このシドッチ神父というのは何故有名になったかと言いますと、新井

江戸切支丹屋敷（東京都文京区）

■2014（平成26）年発掘〈169号壙〉

イタリア人宣教師

●ジョヴァンニ・パティスタ・シドッチ神父

Giovanni B. Sidotti（1668～1714）

1708. 10. 11　屋久島上陸　鹿児島 ➡ 長崎 ➡ 江戸

1709. 11. 1　江戸キリシタン屋敷で新井白石から尋問

1714. 10. 21　キリシタン屋敷「裏門脇」に土葬

新井白石『西洋紀聞』3巻（村岡典嗣校訂 岩波文庫）
山本秀煌『江戸切支丹屋敷の史蹟』（1924）
『文京区切支丹屋敷跡』（2016 テイケイトレード株式会社）

●ジュゼッペ・キアラ神父の墓標

Giuseppe. Chiara（1603～1685）

1643. 6. 27　上陸　長崎 ➡ 江戸（小伝馬町牢屋）

1646. 11. 16　（新設）キリシタン屋敷に

1685. 7. 25　火葬　9. 2無量院に墓標（入寺浄真信士）

1909. 6. 29　雑司ヶ谷内　内藤整墓所に移される

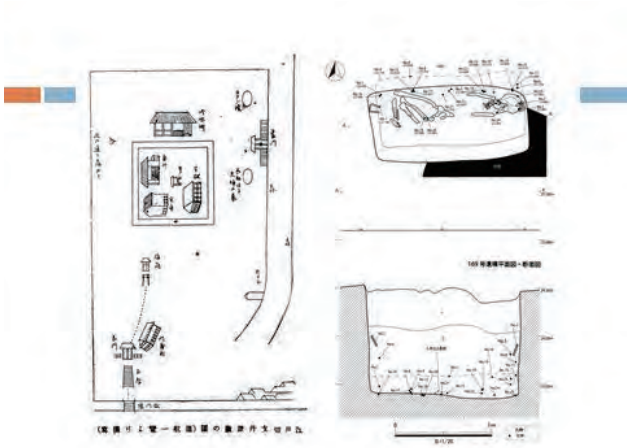
1943. 6. 3　雑司ヶ谷墓地 ➡ 練馬サレジオ神学院

1950. 9　調布市（サレジオ神学院）に

2016. 1. 29　調布市 歴史有形文化財に指定

●遠藤周作『沈黙』のモデル

赤城高志「ジュゼッペ・キアラ神父墓碑」（『調布の文化財』53.2016）
「キアラの墓碑」（サレジオ神学院チマッティ資料館2016）



ジュゼッペ・キアラ神父墓碑

白石がシドッチに訊問をいたしました。その訊問の内容が事細かに『西洋紀聞』記載されております。『西洋紀聞』を元にしまして、1924年に山本秀煌が『江戸切支丹屋敷の史蹟』を出され、その中にシドッチの埋葬場所を書いています。発掘したところ169号壙の中から出土しました。この裏門脇に埋められていたのです。この神父のお世話をした二人の日本人の墓所も発掘されました。その遺体は日本人であるとわかりました。新井白石が訊問した神父の墓が考古学の調査によって出てきたのです。新井白石がシドッチを訊問したときのことは藤沢周平の『市塵』(1989)に出てきますので、よく知られています。

それに関連してもう一人キアラ神父の墓標が調布市の歴史有形文化財に指定されています。これはあまり皆さんに知られていないのですが、現在残されております。何の変哲もない墓標が、頭部をご覧いただきますと帽子をかぶっています。これはほかに例がないと思います。こういう、墓碑の一つに対しましても考古学の対象になるんですね。キアラ神父は遠藤周作の『沈黙』(1966)の主人公です。

これに関連して、家康が江戸に入ってきた時にすでにキリシタンの人々が生活していました。中世末期から近世初めに江戸にキリシタンがいまして、その墓所が出てきました。長方形の木棺の中に十字が書かれたものも出てきている。そういう例からみましても、江戸の初めくらいに、すでにキリシタンの人々が江戸に住んでいたことの証拠が出ています。考古学の材料によってはっきりしました。近世の例を見ても考古学は、歴史の裏面を発掘史料で示しているということができます。

次に、中世の例をご紹介したいと思います。その一つは比叡山です。皆さんよくご存じのように、織田信長によって壊滅させられたといわれています。歴史的には事実かどうか。滋賀県が中心になりまして、比叡山の全体の調査を行いました。その結果わかりましたのは、信長が比叡山を焼打ちした時の被害は根本中堂、講堂の二つだけ。他は全く焼けていない、ということがわかりました。これは一般に説明されている内容と違う、ということ、東塔伽藍その他焼けた痕跡が全く見られなかったのです。根本中堂と講堂の二つだけが焼亡していることがわかります。これにつきましては、興福寺の『多聞院日記』『信長公記』などによりますと明らかに全山が燃えたと書いてありますが、事実はそうではないと考えられるのです。琵琶湖側の日枝神

比叡山焼打ち（滋賀県）

■織田信長（1534～`82）
●元亀２（1571）年９月12日　比叡山延暦寺攻撃
「大講堂・中堂・谷々伽藍不残一宇放火…」
〈『言継卿記』『多聞院日記』『信長公記』〉

●東塔伽藍ほか山中発掘　根本中堂・大講堂 ― 焼亡
〈ほか20地点 ― 元亀焼打ち痕跡無し〉

兼康保明「織田信長比叡山焼打ちの考古学的再検討」（滋賀考古学論叢1.1981）
同　『考古学推理帖』（1966）

社、そちらのほうを発掘しますと焼けたものが出てくる、ということからどうやら史料の記載と実際には異なるのではないかと調査からわかったのです。これも歴史上の定説と考えられてきたことが、考古学的な調査によって史料の記載の裏に隠された事実が証明されることになるのではないかと思います。比叡山の調査は今までやられなかったのですが、比叡山の発掘調査を行った結果、こういうことがわかってきました。信長の力というのは最近に至っても書かれていますが、実際にはそうではないのです。

中世でもう一つ、「元寇関係水中遺跡」というものが出てきました。元寇の遺跡は防塁以外ははっきりしなかったのです。弘安の役、蒙古襲来に伴う蒙古関係の遺物が鷹島の沖合からたくさん出てまいりました。ここに書いてありますが、鷹島町の教育委員会に現在、歴史民俗資料館埋蔵文化財センターが作られています。ここが水中遺跡調査の拠点になっています。このような調査に至るのも、弘安の役に関係する沈没船などが水中から出てきたことがはっきりわかったということです。従来、陸の調査はありますが、なかなか水中まで手が回りませんでした。ところが水中考古学が発達しまして、海中の遺跡も調査できるようになった結果、

元寇関係水中遺跡（長崎県鷹島町）

■文永（1268～）・弘安（1274・81）の役
海底調査
●鷹島（東西約５km、南北約13km、面積16.23km²）
― 蒙古襲来の島（元軍、東路・江南両軍4,400余船 ― 海上集積地域）
南岸の沖合（7.5km）200m調査

1980（昭和55）～`83（昭和58）,1989（昭和63）～`92（平成４）に水中調査
鷹島町教育委員会 ― 歴史民俗資料館埋蔵文化財センター ―
沈没船、錨石、石臼、鉄槍先、鉄釘、陶器片、
青銅印鑑（パスパ文字 「管軍総把印」）

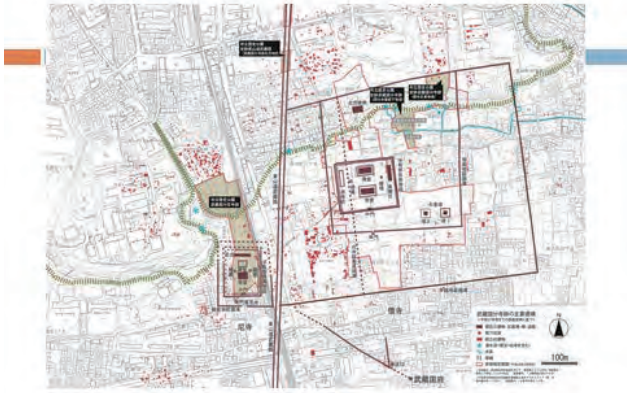
元寇関係の水没船が出てまいりました。その沈没船の調査をしますと、よく玄界灘を渡ってきたと考えられるちゃちな木造船だった。沈没するのは当たり前だということをおっしゃる専門家もいます。このような水中に秘められた遺跡の調査から、元寇に対しても新しい立場から考えていくことが必要ではないか。考古で言う水中考古学の成果を示すものと考えます。

武蔵国分寺跡整備（東京都国分寺市）

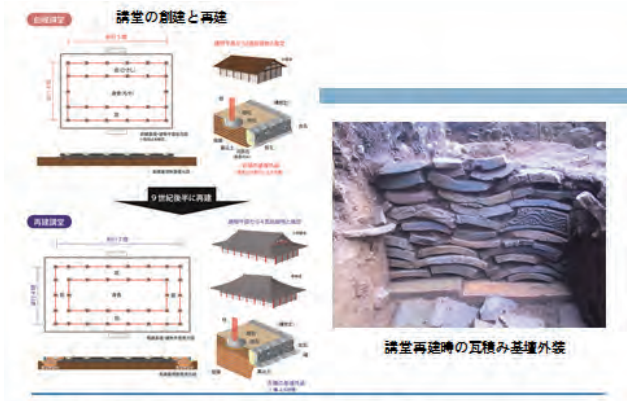
■武蔵国分寺の創建　８世紀の中頃（758年前後）
地震　●弘仁９（818）年７月
「相模・武蔵・下総・常陸・上野・下野等に地震、山崩れ谷埋り死者の数は計りきれない」（『類聚国史』）

●元慶２（878）年９月29日
「関東諸国に地震あり、相模・武蔵とくに被害多く、５～６日の間、震動止まず、公私の屋舎一つとして全きものなく、土地は陥没して官道不通、死者の数きわめて多し」
伽藍の修築　講堂・中門・築地塀・鐘楼・塔（承和２（835）年神火）・金堂

古代の例として「武蔵国分寺跡の整備」についてお話します。武蔵国分寺は現在整備の最中でまだ結論的なことは言えないのですが、取り上げてみたいと思いましたのは、発掘を進めていきますといくつかの問題点が見えてきました。特に、武蔵国分寺は８世紀の中頃に創建されたのは事実でありますが、国分寺の伽藍を掘っていきましたところ、中門の跡、あるいは回廊の跡、その他も再建されていることがわかってきました。調査を実施していく場合には一つ一つの堂跡ごとの調査をやっていきます。そうしますと、その堂の変遷が判りますが、武蔵国分寺のように全域の発掘調査をやってみると相反するものも出てくる。建物を一つだけ取り上げて考えるのではなく、伽藍を構成している堂塔、それを考えていくべきじゃないかと考えるのです。その結果、武蔵国分寺が再整備された段階



武蔵国分寺跡



坂詰秀一「元慶二年の地震と武蔵国分寺」（武蔵野87-1, 2012）
太田和子・増井有真『見学ガイド 武蔵国分寺のはなし』（2014）

があることが判りました。その時代がいつかというのが問題なのです。瓦の研究をしている方の年代観も色々ありますが、武蔵国分寺から出てくる瓦の検討をしますと、少なくとも 2 時期以上あるということがはっきりしています。最近、日本でも地震考古学が盛んですが、その観点からみてみると、どうも武蔵国分寺の関連する場所で大きな地震があったか無かったかを検討すべきではないか。一つが、弘仁 9 年(818)、もう一つは元慶 2 年(878)の地震です。こういう二つの史料があるわけで、再建する必要が生じたというのは地震じゃないかな、と考えるのです。実際の年代はわかりませんが、二つの大きな地震はおそらく武蔵国分寺に影響を及ぼしたのではないか、特に元慶 2 年の史料を見ますと「公私の屋舎一つとして全きものなく、土地は陥没して官道不通、死者の数きわめて多し」と書いてあります。「相模・武蔵被害多く」とありますが、武蔵の場合はどうだったか。従来、国分寺付近の立川断層の動きだろうと言われていたが、最近調べたところ立川断層は多摩川を超えていない、もっと手前で止まっているということがわかりました。大きな断層だけはあったということはっきりしています。この断層は検討しなければいけないのですが、従来はこの断層が多摩川を渡り多摩市にまで延びていた、その落川遺跡にはこれが地震の痕跡であると地震学者が言っておられます。ところが考古学の人がこれを見たら地震の痕跡とは見られない、多摩川は渡ってないとは言っていたのですが、実際にいくつか掘ってみますと、どうも立川断層は立川市より南には存在しているとは考えられない。最近の地震学のデータも踏まえながら考えてみるべきではないか。講堂が東西に拡張されているし、大きくなっております。中門は建て替えられている、築地塀も建て替えられている、鐘楼は修復された跡がある、塔は二つ出てきたのですが、一つの塔は国分寺の創建時にできた塔で承知 2 年に雷に打たれ、10 年後に再建しようと中央政府にお伺いを立てた。その塔が一体どの塔かと問題になってくるのですが、この塔も中門の再建、講堂の増築と同じ時期に再建されていると思われます。金堂はすごく頑丈にできていたようです。講堂は、再建され大きくしています。中門も立て直されている。塔 1 は創建時のものは、焼けたのですが立て直そうということで再建された。西のほうからもう一つ新しい塔がでてきましたが、建物が建っていないということがわかりました。建物が建っていないということは、調査の結果どのようなことが言えるかを考えていく必要があると思っております。立川断層と言われるのはこちらです。講堂跡を調査したところ、創建時の瓦を再建時に使用して作っている。したがって、この講堂は再建されたということがわかりました。こういうことから、いつの段階で直したのかということが問題になってきたのですが、地震が国分寺の再建に大きな役割を果たしたのではないかと考えたのです。従来、国分寺がいつ創建したか、その後どのように変遷を遂げているのかわかっていなかったのです。一つの堂だけの調査ではなかなかこういうことがわかりません。伽藍全体を調査しますと、全体を通して歴史的な事実を考える資料がでてくると考えます。発掘された遺構は単独の遺構の観察だけでなくて、大規模な遺跡の場合には遺跡全体を通して遺跡の性格を考える。そういう場合、このような調査のデータを考えてみる事が必要です。文献史料と合わせて考古学的な資料を重ね合わせて考える事が必要なのですが、最近発達してまいりました地震学の成果も組み入れることも必要です。考古学は何年何月何日かわかりません。どのくらいの時期にこういうことが起こったのかがわかります。9 世紀の後半くらいに再建がやられたのだろうか。ところが塔の跡を見てみますと創建の塔も再建の塔も出てまいりました。再建の塔がはっきりしているかどうかも問題になったのですが、再建の塔の下を掘ってみたら、礎石の下に、創建時のものが埋め込まれているということがわかりました。塔は明らかにやり直さ

れている。その後もう一つの塔の基壇が出てきたというので、これは塔が二つあるのかなとも考えたことがあります。結局は先ほど申しましたように、一つの塔は基壇だけ出てきまして、塔は立っていない。それは承和 12 年(845)に建てようという時におそらく作り始めた基壇だった。ところがそれが完成しないうちに大きな地震があったのではないか、そこで創建した塔のところを再度活用して全体の整備を行った。武蔵の国の郡から献上した瓦が講堂全域で出てくる。ところが塔の再建の瓦も調べてみたら十数の郡名の瓦が出てきた。すなわち個人の力でなく、各郡の力を総合した再建事業ではないかと。

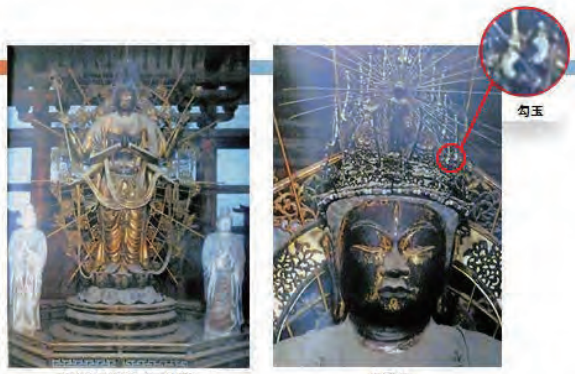
調査により、もう一回考えてみる必要がある。同じようなことが武蔵国府の中枢の官衙が調査された結果、そこでも三回の立て直しがあることがわかりました。それは武蔵国分寺と同じような瓦が出ている。遺跡の状況から言いますと、南の方の国庁も被害を受けていることがわかりました。その国庁が再建され、武蔵国分寺の再建された後の時代から武蔵の国府の中心地域に大集落が出現してまいります。

8つ目の例として、東大寺法華堂について考えます。法華堂の乾漆像。皆さんご覧になったことがありますでしょうか。堂に入りますと不空羂索観音像があります。頭に立派な冠をかぶっています。この不空羂索観音ができた時期ですが、文献などによりますと天平 18 年(746)から 20 年の間に本尊が造られたと見当がついています。この像で特徴的なのは、像の王冠に 26000 点の翡翠・琥珀・水晶・真珠の玉がついている。王冠にこんなに玉を付けた像は他にありません。暗いのでよく見えないのですが、翡翠の勾玉が 8 個ついている。一体これはどういうことなのだろう。以前、森浩一先生からヒスイについて話せという話がありまして、そこで不空羂索観音をめぐる問題について取り上げたことがあります。その時、なぜ勾玉があるのか、推測しました。平城京を造った時にたくさんの古墳が削平されています。大きな前方後円墳も削平して造ったということは明らかです。発掘により、古墳の痕跡が平城京の下から出てまいりました。そういうことを考えますとこの勾玉類は、あるいはそれらの古墳に埋められていたものではないか。三月堂の不空羂索観音の王冠に勾玉などの玉を飾って死者の霊、古墳の霊を祀ったのだろう。ちょうど不空羂索観音のできた頃は観音信仰が盛んになった頃でした。不空羂索観音の信仰があり、その段階で作られた像の冠に勾玉などを飾って平城京を建設するために破壊してしまった古墳の霊を慰める、そういう事もあったのではないか。そうでなければこれだけのものが飾ってあることがありえないです。韓国の学者が来た時にこの話を披露したことがあ

東大寺法華堂・不空羂索観音立像（奈良市）

■法華堂（三月堂）本尊　乾漆像（像高362cm）
○頭上に銀製鍍金の宝冠
26,000余点の翡翠・琥珀・水晶・真珠などの珠玉、銀線使用
〈正面に阿弥陀如来の化仏立像（銀像鍍金23.6cm）〉
○翡翠勾玉　8個
●本尊は、天平18（746）～`20（748）の造像
（東大寺創建745年頃　大仏開眼751年）
平城京710～787

坂詰秀一「仏教における玉」（森浩一編『古代王権と玉の謎』1991」）



東大寺法華堂（三月堂）
不空羂索観音立像

宝冠部

ります。仏像の研究を考古学の立場でもう一度見直すということもできるのではないか。平城京建立の裏の歴史に表れてこないような認識が考古学の材料によってある程度考えられるのではないかと思います。王冠は王の冠ですから、ただいきなり仏像にかぶせるという例はありません。そんな風に考えてみたらどうかな、と考えたことがございます。こういう観点から見ますと、仏像を考古学の立場で考えるのも必要だろう。仏像は仏教史や仏像学研究者がやっているからあまり深入りしてはいかん、あれは仏像学に任せたらいいんだと、おっしゃっていた先生もいますが、やはり仏像も考古学の立場から考えることも必要になってくると思われます。これは一つの例として取り上げたわけです。

戦後、歴史考古学が始まった時にある先生は、「考古学は文化をやるべきだ。古代の文化を研究すれば良いのであって、政治とか経済とか思想とか、特に社会問題については深入りするな。文化だけやればいいんだ」とおっしゃった。しばらくそういう時代が過ぎたわけですが、その後、考古学的な資料の研究が進んでまいりますと、生産の問題その他に対してもそうでありますように、幅がだんだん広がってまいりまして、考古学は単に文化だけを扱うのではない、歴史全般を扱う学問としての位置づけをすべきだ、という意見が出て

きたわけです。そういう動きが一段と進んでまいりまして、特に東京におきましては再開発も増え、近世の考古学もだんだんわかってまいりました。

また、中世の考古学も大いに発展していると言えます。近世、あるいは近世より新しい近代も考古学の範囲になってまいりました。時代を決めるために色々な内容をどうチェックしていくか、一時は自然科学の材料が出てくると考古学はそれに引っ張られていました。文献史料のある時代は比較的しやすい条件が整っておりますので、今後十分に検討していかなければならないと思います。かつて考古学の対象というものは遺物である、と主張していたわけですが、戦後は、遺物は遺跡の中にあるのだから遺跡の一部にすぎない、と言われていたことを思い出しました。そういうことを考えておりますと、考古学は物を通して歴史を考える学問ですから、物を頭に置きながら考える。江上波夫先生は、考古学というのは昨日以前のことを対象にする、とおっしゃっていたことも記憶しております。時代と空間を超越して考えることが大切だと考えております。考古学にも色々な内容が含まれております。時代によって文献史料の豊富に出る時代、文献が全く無い時代。今お話ししてきたのは文献史料が豊富にある時代ですので、ある程度は文献史料によって解釈ができると思います。ただ、文献史料は史料批判が必要であると言われています。信長の比叡山焼は、まさに文献史料に沿って当時の歴史事情を考えてきたと言えます。その信長自身が最期を遂げました本能寺の調査、従来は何であんなところに信長が滞在していたのか、と言われていたのですが、調査をしたらとんでもない、本能寺というのは大きな堀に囲まれました館的なものだということがわかりました。これも一つ考古学の成果だと思います。大きな堀に囲まれたお堂の中が信長の拠点だった。それを攻めたということですから、まさに城を攻めるようなものだったと思います。簡単に事態が収拾したと考えられておりましたが、実はそうではないということも、本能寺の発掘によって考えられてきました。同じように、秀吉はいわゆる金箔瓦が大好きだということで、秀吉関係の館には金箔瓦を使っていた。そんなことはありえない、と言われましたが、掘ってみますと確かに秀吉関係の金箔瓦が出てくるのです。考古学は正直ですから、その正直な材料をどう解釈するかが必要です。徳川家康が江戸に移ったときにキリシタンが住んでいたことについても、文献史料には出てきません。秀吉は迫害しましたが、家康はキリシタンを優遇しました。そういうことから、キリシタンの集落が形成されてもおかしくはない、特にそれが今の東京駅の八重洲口からキリシタンの墓が出てきました。信長、秀吉、家康それぞれ歴史的に有名な人々の歴史的な事実というのも一つ一つ考古学の立場で検討していきますと、意外に我々が思いつかなかった事実が出てくるのではないかと思われます。今後考古学の資料はたくさん出てくると思いますが、それらを総合して新しい歴史を進めていく必要があるのではないか。歴史的な問題と合わせまして自然科学の力ももちろん必要と思われます。あるいは、それぞれの宗教現象なども考えないといけません。これらの事実を重ねながら実際の歴史の事実を把握することも必要ではないかと思います。

これからお話いただく縄文時代が専門の小林先生は酒詰仲男先生の「考古学者はシャベルを持った哲学者である」の名言を実践されておられます。小林先生のお考えは従来の縄文時代研究の域を超えているのではないかと思います。今日お話しいただく題も「縄文人の思考」です。その中に小林縄文人の神髄が含まれているのではないかと思います。文献の全くない時代の考古学を小林先生のお話で伺えればと思います。

先生の前座を務める私は文献の存在する時代についてお話をいたしました。時間も十分ございませんでしたので急ぎましたけれども、考古学は歴史の一コマ一コマを明らかにする重要な役割をもつものではないかと思っております。特に保存だけでなく活用を考えなくてはいけないという趣旨の話も聞きます。考古学的な問題も単なる保存だけではなくて活用する、考えるという方向へシフトしていくのではないかと思われます。縄文土器の研究を社会的に位置づけようという運動をされているお一人の代表が小林先生です。今後の考古学は保存するのはもちろんですが、主に活用することを考えていかないといけない。そのためには考古学そのものの性格を十分に認識して考えないといけないと思います。本日、小林先生の縄文人の思考、いわゆる小林縄文人、と言ったら失礼ですが、小林縄文学の神髄を、「縄文の思考」というテーマでお話を伺おうことに際しまして、一言私なりに色々考えておりましたことに触れ、文献の存在した考古学をお話しさせていただきました。時間になりましたのでこれで失礼します。

［追記］

（1）事例として取り上げた遺跡などの文献については配布資料に掲げています。

（2）倒叙法で書いた坂詰の『歴史時代を掘る』（2013、同成社）の中に、講演で紹介した遺跡については参考文献ともども記載してありますので参照して下されば幸いです。

（3）近世の事例として取り上げた「シドッチ神父」の墓については、篠田謙一『江戸の骨は語る－甦った宣教師シドッチのＤＮＡ－』（2018、岩波書店）が刊行されました。

講演「縄文の思考」

小 林 達 雄

みなさん、こんにちは。先ほどの坂詰先生の話の最後に付け足して、私のあれこれを紹介してくださいましたが、だんだん梯子に登らされたみたいな感じで気恥ずかしいところもあります。坂詰先生と私とは、あまり歳が変わらないのですね。あえて言えば先生のほうが一歳年上です。ところが私が大学に入った時にはもうすでに大活躍されておりまして、あの頃は縄文のことについて坂詰先生がお書きになったものが多い時代でした。それらでいっぱい勉強させてもらいました。いつの間にか、どんどん研究の幅を広げられて、今日のお話になっていくのですけれども、文字を使用するようになって以後の時代に関する考古学の方向から切り込んでいった日本の考古学を紹介してくださいました。後ほど、先生を相手にして色々おしゃべりをさせていただきますけれども、むしろ私の方が色々お聞きしたいことがあるにも関わらず、いつの間にか坂詰先生から私が尋ねられて話をするという段取りになっていました。それほど重大に考えていなかったのですけれども、さきほど昼食の弁当を使っている間に、坂詰先生からいろいろと話しかけられまして、こういうことを聞くぞ、と脅されている次第です。後の対談それはそれとして、最初に私からの縄文についての話を暫しさせていただきたいと思います。本日はこのような日本文化財保護協会の活動の一環に加えていただきまして、大変うれしく思っています。

さて、人類の歴史を大きな観点で見ていきますと、第一段はいわゆる旧石器時代にほぼ相当します。乱暴な言い方ですが、わかりやすくイメージするためにはそのほうがよいと思います。旧石器時代の生活様式は、遊動的なスタイルでした。遊動的というのは遊びほうけることではなく、動き回る生活です。何のためかというのは、食べ物を求めて動き回るとわけです。人類の歴史では遊動的な生活がずっと続いていました。遊動的な段階では、道路があってその道を歩いたわけではありません。木の根っこがあったり石ころがあったりして、けつまずいたりしながら動いたので、しんどかったのはお年寄りです。私も相当歳になりまして、ひしひしとそれを実感するようになりました。ヨタヨタするのですね。つまらないないところで、けつまずいたりします。道なき道を動き回るときの老人層がいかに大変だったか、容易に想像できます。それゆえにお年寄りが途中でどんどん落伍していくのです。ネイティブ・アメリカンの色々な物語が残っていて、その中には実話がたくさん含まれていたことでしょう。途中で老人が脱落していくという逸話は色んな部族にたくさん残っています。

生活様式が遊動的な段階では老人がどんどん落伍していくわけですが、見方を少し変えてみると、老人こそが一番経験豊かです。言い換えれば情報をいっぱい持っているのです。たくさんの情報を持ちながら落伍していくのです。だから何十万年という長い旧石器時代の歴史は横一線で、なかなか右肩上がりの成長になりにくいわけです。働き盛りの若者の世代は、老人だけではなく、自分の子供も養っていかなくてはならない。ですから経験の浅い若者は、一方で老人の積み上げてきた経験を消費する関係になります。したがって、なかなか文化として情報の蓄積がスムーズにはいかない、そういう事情があります。これが人類の歴史の第一段階です。

第二段階は旧石器時代の次に来る新石器時代の段階です。そういう段階は日本列島を舞台とする歴史には見えにくいのです。それでしばしば縄文というのが新石器に並行するのだ、あるいは同じようなものなのだという考え方が出るのですが、新石器時代の最も重要な要素は農耕です。ところが日本列島での農耕は弥生時代以降です。その前、一万年以上の長い縄文時代があるわけですけれども、縄文時代の去就は、長らくいろいろな人が、先ほどの坂詰先生のお話にも出てきました山内清男先生も、縄文の研究を推進しながらも、その扱いについて世界史的な位置づけで苦労されていました。その結果、土器を持っていて、定住的な生活様式の縄文は、しかしながら農具をもっていないことに注意を払います。これは大きな欠点を抱えた新石器だという考え方を示されたわけです。

縄文という第二段階は、遊動的な生活から、定住的なムラを持つ、そういう段階に進んだことを意味します。定住的なムラに進む、ここが縄文の始まりと、日本列島における歴史における縄文の始まりということで、私は「縄文革命」と呼んでいます。縄文革命のはじまりに土器があります。最近はあちこちで土器作りが行われていて、みんな楽しんでいるムードもありますが、土器作りをやるというのは容易なことではありません。粘土を確保する。その辺の土を使えば、すぐ土器になるかというとそんなものではないのです。
縄文人は一生懸命に土器作り向きの良い粘土を苦労して探していました。数は少ないのですが、多摩ニュー

タウンの中にも一箇所見つかっていますが、全国的にもまだ片手に余るほどの数しか見つかっていないのですが、粘土採掘跡が発見されています。それらは見事に良い粘土を掘り当たっていて、そういう苦労を各地の土器作りをやっていた縄文人は必要としていたと推測できます。掘り出した粘土はムラに持ち込めば、すぐに土器を作れるわけではありません。精製して、こねて、寝かせて、ようやく土器作りが可能になります。容器の形にした後、文様をつけたりしながら、焼くまでの間に十分に乾燥させる必要があります。乾燥した後、今度は焼いていきますが、焼くための薪を集めてこなければなりません。そして焼き上げるわけですけれども、今、一分とかからず、土器作りの話をしましたが、実際の土器作りには大変な日数がかかるわけです。そういう日数がかかる土器を製作し、使うようになったという縄文革命以降はとてもじゃないけれど動き回っているような生活スタイルの中には不可能です。ですから土器を持つようになったことが、定住的なムラが始まったという何よりの証拠とみて良いと思います。これをもちまして、縄文革命による新しい人類の歴史的段階、第二段階に日本列島も入り、定住的なムラを営むようになった、とみるわけです。

ところで、この考え方は自分自身を振り返ってみると、もう30年以上前からそのように考えていて、いつもそのように紹介するのですが、意外なほどに、この考えは浸透しにくいです。直接、僕と話した人は「うん」と言ってくれるのですが、ちょっと距離を置くと、あるいは大学が違うとか、あまり僕に賛同してくれないのです。仕方がないと思っていれば、それで済むはずだったのですけれど、やがて私が大学にいるということがありまして、教え子との関係がだんだんできて、教え子が増えていくのですが、油断しているうちに教え子のトップグループが私に反旗を翻して、言ってくれなくなったりして、ああ、こうやって歳をとるというさみしさをひしひしと感じているわけです。けれども、今ほど話したような土器作りのちょっとしたエピソードで理解いただけるように、遊動的から生活から定住的なムラへというのは、歴史的な大事であり、だからこそ、縄文革命と呼んでいるのです。

遊動的な生活スタイルの中では老人が落伍することによってなかなか文化の蓄積というものが望めない。ところが定住的なムラの段階に入ると、ここでお年寄りは動き回らなくて済むのです。そしてムラで留守番をしている。働き盛りの若夫婦は外に出て食べ物を手に入れ、必要な道具の材料を手に入れて、ムラに戻ってくる。そのようにして文化的生活、社会的生活、経済的生活の拠点としてのムラがどんどん膨らんでいきます。色々なものが老人とともに途中で無くならないで蓄積されていくようになります。いわば気が付いたらムラというのは彼らにとっての情報センターである、図書館である、文化センターである、そういう機能を高めるようになります。

このようにして縄文は文化を形成し、そして、その充実の度合いを高めていった、と理解できます。縄文の研究者の中には、次のような考え方を持つ方もいます。縄文文化というのは素晴らしい。充実の度合いから見ても見事なものだ。これは到底狩猟採集漁撈だけでは済まないだろう。もっと、ちゃんとした経済的な基盤があったに違いない。何かというとそれは農耕です。農耕を持っていたのだ。だから縄文はあれだけの文化を築くことができたのだと、そう考えている人が結構増えています。そのような考えには一つ問題が含まれています。農耕よりも狩猟採集漁撈のほうがいろいろな観点から見て低く評価されているのです。そういう歴史的理解があり、今もそういう見方をしているので、縄文の文化が農耕抜きには考えられないほどの内容を持っている。だから農耕をやっていたのだろうという話になるわけです。このような考えをもっている人は大勢います。私はそれに同調しない一人なのですが、同調しない私は、縄文農耕を推進している人たちから遠ざけられておりまして、なかなか私が近づくことができない地域や、なかなか私の考えが届かないところがあります。しかしながら、実はそうではなく、縄文人は農耕抜きにしても、食料事情とか生活基盤は十分に安定させられていた、そのあたりに目を向けなければいけないと考えています。

それは何かと言えば、多種多様なものを縄文人は利用することで、食料事情を安定させようという方針にのっとっているわけです。それに対して、農耕はそうではないのです。ごく少数の栽培作物に時間と労力を投入して増産を図ることによって、食料事情を安定させようという方針なのです。これは全く農耕と縄文との考え方が対立するもので、ごく少数のものに頼っている農耕に対して、縄文人の多種多様なものを利用する考えを「縄文姿勢方針」と私は言っています。縄文姿勢方針は、口先だけの施政方針と違って、体ごとの生き方の姿勢です。ごく少数のものに依存する農耕の対極にあって、多種多様なものを利用するという方針を貫いてきたのです。それが縄文文化をずっと安定させた一番大きな基盤になっていると考えるわけです。一方、アズキを栽培していたのではないか、クリを栽培していたのではないかという事実があちこちで指摘されはじめますと、そうだこれだけ栽培しているのだから農耕だ、という話と結びついてきます。しかしな

がら、私はそれらについても縄文姿勢方針の一部と考えています。栽培は多種多様なものを利用するときの工夫の一種とみています。クリを一生懸命に植えて花実をつけさせて増産を図る。そのような栗の栽培はないと考えています。特定の場所に生えるクリのDNAを調べてみると、単純なDNAにまとまる。ある場所のクリの何本かから始まって、特定の場所で勢力を伸ばしたわけですから DNA のバラエティーが少ないことは当然で、その事実をもって栽培だということには直接ならないと思います。

私は植物もとても好きです。子供のころは昆虫採集から始まりましたが、やがて植物採集になりまして、山に行って、面白い、あるいは気に入った植物に出会うと、それらを引っこ抜いて庭に植えたものです。私がそのような植物の移植をしていても、誰も園芸屋だとは思いません。植木屋でもないです。私はただ自分の生活の中の一部で、植物との関係を持ったというだけの話です。

縄文人の栽培的な行為は大それたことではないのです。それは全く農耕とは違うのです。くどいようですけれども、農耕はごく少数の栽培作物に時間と労力を投入します。それによって食料事情を安定させようとするわけですが、縄文姿勢方針は多種多様なものを利用することで、食料事情を安定させます。多種多様なものを利用する作戦の一つに栽培もあり得ます。食料事情を安定させる戦略に栽培的な行為を含んでいるだけで、栽培植物があるからといって縄文姿勢方針の大きな流れ、筋を変えようとしていないのです。

太平洋を隔てた対岸北米西海岸にバンクーバーやシアトルがあります。あの辺りはトーテムポールを立てた人たちの生活圏でした。その人たちも農耕をしていません。あれだけの文化を持ちながら、農耕は無いのです。けれども、案の定、栽培的なものがちらほらあります。例えば、ユリの仲間の根っこが大事な主食の一つにしているのですが、それを採集に行った時、食べられる大きさのものを採集するのですが、まだ小さいものなどを、そのまま残すのではなく、引っこ抜いて地面の良いところに植え替えたりしたのです。その行為のシルエットだけを見れば、まさに畑仕事です。けれどもそれは農耕ではない。くどいから言いませんが、農耕にみえる姿勢とは全然違います。それから焼畑的なこともやります。ブルーベリーは年数を重ねると、実がだんだん小粒になっていくのですが、そうすると、そこを焼き払うのです。すると若い芽が出て、また大粒のブルーベリーをつけるようになります。そのような焼畑的な手入れも、トーテムポールを立てた人たちはやっています。けれども誰もそれを農耕とは言いません。左様に縄文人もその程度のことをやっている。やっている事実はあるけれども、さあ、これも栽培しているあれも栽培している、だから農耕だ、そう言ってはいけないのです。

これは、よく認識しておく必要があります。そうではないと、農耕という経済と、それ以前の狩猟採集漁撈という自然経済との境目が曖昧になってきて、歴史的な叙述がうまくいきません。縄文時代にも農耕があった、そして次も、農耕の一段進んだものをやり始めたということでは、歴史的な流れを明確にとらえるということにはならないと思います。

縄文人の栽培について、私は次のような言葉で説明しています。縄文人による「自然の人工化」です。栽培と並んで、縄文人はいろいろな方面で自然の人工化を発揮しております。例えばアク抜きとか渋抜き毒抜き、そういうものも自然の人工化の一環であると見ています。縄文人の狩猟採集漁撈、それだけで語ることのできない豊かな内容を持つ諸々を縄文姿勢方針と呼び、それを徹底するためにこそ、自然の人工化が進められていたと考えるわけです。

次に縄文人を象徴する持ち物である土器について、しばし考えてみたいと思います。土器というのは粘土で作った器です。世界中どの地域でも土器を持つようになります。持たないところも相当ありますが順調に歴史を動かしてきた地域では、土器を持つことが多いようです。土器は器であり、器の大きな機能は貯蔵です。もう一つは盛り付けです。我々の食卓をイメージしていただくとわかりやすいでしょう。盛り付け、次いで貯蔵の器が目に浮かぶことでしょう。これが大きな器の機能です。実は西アジア、中近東、イラン、イラクあの辺りはかねてより土器の発明地だとみなされてきました。そして、その土器が大陸をずっと横断しながら極東まで来て、そこから縄文土器が生み出されたというイメージです 。山内清男先生のイメージがそうでした 。しかし、新しい事実が発見され、その一方で年代測定方法が開発された結果、どうなったかと言うと、西アジア、中近東の土器はせいぜい9,000年ほど前までしか遡らず、縄文土器の一番古い年代は15,000年以上まで遡ることがはっきりしてきました 。千年二千年の誤差があったとしても、9,000年と15,000年という年代の開きは歴然です。そもそも今の感覚や意味と年代差は全く違うかもしれません。しかし、絶対的な年代差は紛れもない事実です。実は先ほど申しました器として貯蔵用と盛り付け用というのは、西アジア、中近東の土器がそれらから始まっているのです。ところが縄文土器の最初は煮炊き用、つまり鍋釜なのです。それは土器の内面にオコゲがくっついていたり、土器

の外面が火を受けて変色していたりという事実から窺い知ることができます。

実は土器を持とうという動機がユーラシア大陸の東西で全く違うのです。そして出現年代がものすごく離れていて、古い年代をもつ方から新しい年代をもつ方へ伝播したと単純に言えない状況なのです。

この際はっきりと、土器は大層な発明品だけれども、人類がどこか一か所で発明し、それが伝播して、あるいはそれを真似して作れる代物ではないと言いたい。土器は何箇所かの地域で発明されていたのではないかということを我々に示唆する証拠もあります。案の定、新大陸にも古い土器が見つかっています。新大陸の古い土器は、発見初期には日本の縄文土器が太平洋をはるばる航海して新大陸まで届いたものとみる説もありましたが、その後、それらよりも、もっと山沿いの流域で貝塚に伴う土器が発見されています。年代も6,500年 前から7,000年前くらい前までさかのぼります。中近東、西アジアの古い土器の年代と比べるとやや新しいのですが、旧大陸から土器という新しい技術を手に入れた証拠を見出せません。素直に考えれば、新大陸は新大陸で土器を発明したと考えていいかと思います。私は、現在、世界で少なくとも3箇所は、土器の発明地があったと見ています。まだあるかもしれません。少なくとも3箇所です。新大陸の土器は煮炊き用に使っています。それに肩を並べる兄弟みたいなものだけれども出身が違う土器が縄文土器です。縄文土器は縄文土器で、独立して土器を発明した。考古学の研究者に限らないのですが、日本人は非常に控えめで、何か新しいものがあるとそれはお隣の中国からお借りしたとか、あるいは真似をしたとか、向こうからの影響を受けたというふうに考える人が意外と多いのです。語学の堪能な人たちは、俺はシベリアをやる、俺は中国をやる、俺は韓国をやると、そんなふうに、いろいろなところで活躍している人たちがそれぞれの地域の情勢について、新しいことを伝えてくれます。あるいは縄文土器のルーツを考える大事なデータだろうと教えてくれます。国内で研究している人達は、ああいいことを教わったと思い、それらの地域から伝わったに違いないと思っているうちに、段々と日本の縄文土器は孤立して古くなってきたという事情があります。

思い切って、縄文土器は日本列島で発明された可能性が相当に高いと考えていいのではないでしょうか。少なくとも縄文土器と同じような土器が、日本列島以外のところで作られていたとしても、そのすぐそばに縄文土器はあった、縄文人がいた、そのように考えていいと思います。マラソンレースと同じように、土器作りレースというものを地球全体で考えると、東京マラソンは東京でやりますけれど、その一方で世界各地のマラソン大会と競い合うわけです。土器作りレースの一つは西アジアで始まった。もう一つは日本列島を含む極東で始まった。そして、その先頭集団トップグループには縄文人がいたと可能性がある。たとえ、トップグループにいなかったにしても、トップグループのすぐ側に並んで走る呼吸が聞こえるような、そういう位置取りで縄文人は走っていた。そう見ていいのではないかと思います。そうしたら、考古学はもっとしっかりしたテーマで研究ができるのではないかと思います。その辺で、もたもたして研究しているからいつまでたっても縄文の研究は先に進まないのです。それは突拍子もない考えではないと思います。

皆さん、よくご存知の漆がそうです。漆も中国大陸から来たと、ずっと考えられてきました。案の定、中国の遺跡から6,000年ほど前の漆が発見されました。あれがルーツと言っているうちに、それと並行する日本列島の縄文前期、さらに前期を通り抜けて縄文早期に遡る事例が北海道函館市で発見されました。漆のようなとんでもない技術でも、意外といろいろなところで発見発明されたことを認めざるを得ないのではないかと思います。

釣り針もそうです。縄文人の釣り針は、素材こそ違いますが現代の釣り針と同じくフックのような「し」の字状に曲がった形に鹿角などで作られます。そうではない釣り針もあるのですが、フックのような「し」の字状に曲がった釣り針は日本でも縄文早期の貝塚から出ています。これは世界的に見ても古い部類でした。南太平洋では貝殻で作った釣り針が出てきます。これもフックのような「し」の字状に曲がった釣り針です。世界中あちこちで出てくる釣り針は、いずれもフックのような「し」の字状に曲がっています。人類が発見発明した釣り針は、これ以外の形をとりえないのです。それが唯一無二、究極の形なのです。それに気がついた集団がいる。縄文人も独自に気がついた。南太平洋全般、それぞれに独自に気が付いていた可能性があります。

同様の例を挙げていくと、石槍は世界中あちこちで出ています。槍は先が尖っています。そして大概は左右対称です。これが究極の槍の形なのです。これ以外の槍を作ろうとしても作れない。槍が出てきたからといって、あっちから来たこっちからきたというのは間違いです。むしろ、人類は槍という形と、狩猟具に使うことを結合させることを、各地でそれぞれに発明発見したのです。世界各地で遅い早いという違いはありますし、発明発見しないで、よその形を拝借した連中もいたでしょうけれども、それが実態ではないのかと

思います。

縄文人の石斧。縄文人は磨製石斧を持っています。磨製石斧も全世界どこでも大概あります 。磨製石斧もあっちから来たこっちからというのではなく、各地で発明されているとみるべきでしょう。そういうふうに見ていくと、日常的な生活を送るのに必要な道具、何かと言うと、食べ物を手に入れるための道具などは必要に応じて発明され、共通する形が世界中あちらこちらで、それぞれに生まれた可能性があり得るのです。あっちが古い、こっちが古いと決めることも大切ですが、あっちが古いから発祥地で、こっちが新しいから伝播したと考える必要はないでしょう。人類が共通して持っているようなもの、日常的な生活に必要とするもの、それらを私は「第一の道具」と呼んでいます。人類の基本的な道具箱です。その基本的な道具箱に入っている道具の種類は、おそらく一つ二つの地域ではなく、相当数の地域で、それぞれ独立して発明発見されたと考えておく必要があるのではないかと思います。その一方で、人類に共通しない道具があります。日常的な生活戦略に必要な道具ではないものです。一風変わったものです。その代表が土偶であり、石棒であり、石剣だとか石刀だとか、そういうものです。あるいは土版、岩版というものです。私はそれを「第二の道具」と言います。 第一の道具は手で使うのです 。第二の道具は手ではなくて頭で使います 。それが第一の道具と第二の道具との違いなのです。縄文人は第二の道具をたくさん持っていました。第二の道具のありかたは、縄文文化を特色づける相当に有力な要素です。朝鮮半島には、縄文時代と同じ年代に第二の道具がほとんど見当たりません。土偶ひとつとってみても、ほとんどありません。第二の道具のありようこそが縄文の特徴なのです。そうして見ると、縄文の文化的な特性というか、主体性が浮かび上がってきます。

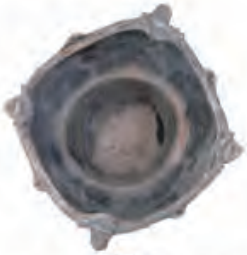
ところで縄文土器は象徴的存在、縄文を代表する代物です。なぜか言えば、縄文土器は世界各地の土器と比べるときわだった特徴をもっているからです。土器は器ですから、これだけの容量が必要だと判断すれば、それに見合った大きさを作ればいいわけです。漏れないように底があって、出し入れするに足る口があればいいわけです。単純に底と口を結べば容器の形になります。世界中の焼き物は、古い段階ほど大概は、このような最低限の要件を満たした容器の形をしています。あるいはこれを容器の背丈を引き伸ばしたり縮めたり、口の大小、底の大小などに違いはありますが、容器になる単純な形をしています。ところが縄文に限っては、最初の頃こそ、容器たりえる単純な形ですが、気が付きと容器の要件と密接にかかわらない変なものが出現します。変なものは草創期にも多少ありますが、早期には明確化します。それが突起です。土器の口縁は平らで十分機能するはずですが、口縁に突起をつけるのです。あるいは波状させ、口縁をうねらせます。突起に最初に気がついたのが E.S.モースです。大森貝塚の土器のおもしろい特徴として、波状口縁や口縁の突起に注意を向けました。その後、口縁の突起や波状口縁の形についてはっきりと指摘したり、問題にしたりする研究者はほとんどいないのですが、さすが山内清男先生はこれに目をつけて E.S.モースが言っている口縁に突起がある、波状を呈する口縁について縄文土器の特徴だと言っています。その特徴は縄文土器以外、世界の焼き物の歴史の中で見ることはできません。全く縄文土器は孤立した存在です。わかりやすく極端に言いましたけれども、パプア・ニューギニアの人たちの土器には、縄文土器と似ているものがあります。マヤ文明などの土器にも形が多様性に富み、器とは別の機能を重ねているものがあります。しかしながら、器として焼き物の歴史を見ていくと、縄文土器は孤立していて、古今東西の焼き物の歴史に他に例を見ないのです。

口縁の突起の中には、特に縄文中期の仰々しい土器があります。関東・中部山岳地帯の勝坂式土器あるいは曽利式土器とか、越後の火焔土器を見れば、それがよくわかります。あんな大仰な突起がある焼き物は、世界にどこにもありません。そもそも土器は容器として作っていますから、物を出し入れする、あるいは貯め込むことに本義があります。そこについた大きな突起は無用の長物なのです。無用の長物ならば、まだしも物を出し入れする時には邪魔になる存在です。むしろ困ったこしらえなのです。縄文土器にはそういう特筆した特徴性があります。これは縄文人の想いが、他の焼き物を作っている地域の人たちとは違うところにあったということを明らかに示しています。使い勝手としてみれば、やっかいな存在なのにわざわざ口縁に突起を作る。

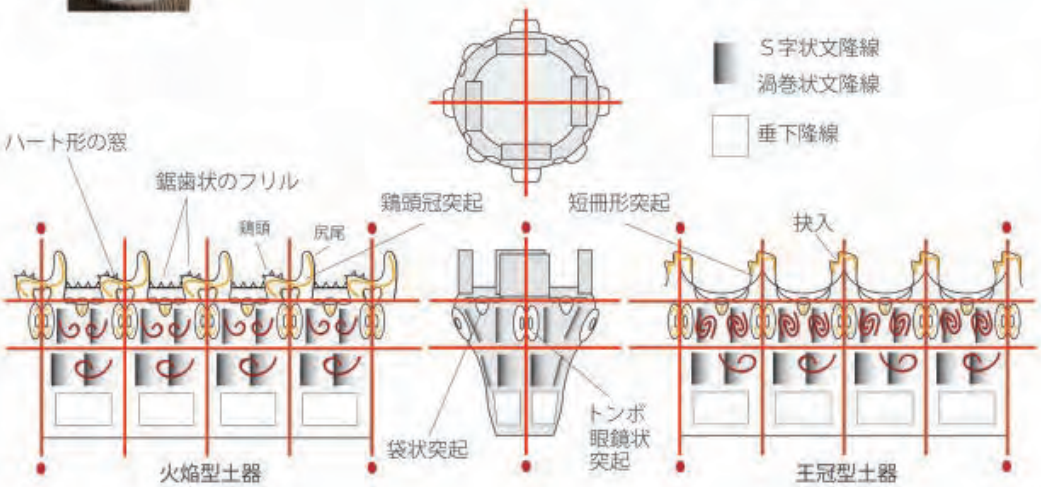
私は、現代人同様に縄文人にとっても言葉がとても重要な役割を果たしたと考えています。縄文人も言葉を持ち、言語活動をしていたという前提で縄文文化を、弥生文化も同様ですが、考えています。そうして縄文文化を見ていくと、見えていなかったものが浮かび上がってきます。わざわざ土器の口縁に突起を付け、そのような作り方を維持するということは、その突起には意味があって、その意味をもった名前があるとみます。

それは突起という名前なのです。私は日本人がしゃべっていたそういう言葉について、我々には相応の教

火焔型土器
岩野原遺跡 出土
長岡市立科学博物館 所蔵
大英博物館 貸出中



王冠型土器
岩野原遺跡 出土
長岡市立科学博物館 所蔵
大英博物館 貸出中



火焔型土器と王冠型土器　文様構造と各部位の名称（今福 1990 改変）

養があるので、「突起」という漢字を使いますけれども、そういうことをご破算にして、しかし、縄文人も名前をあらゆるものに付けていたと考えながら、カタカナ表記にすることにしています。突起は「トッキ」、縄文人はトッキという言葉を持っていたのです。そして、土器にはどうしても突起を付けなければならない、已むに已まれぬ事情と思想がそこに重なっていると言うことです。

おもしろいことに、縄文土器の突起に注目した研究者はそれほど多くありませんが、重要な指摘がなされています。先ほど申しましたように E.S.モースから山内清男先生へ、お二人がその特徴に触れているのですが、その間にもう一人います。鳥居龍蔵です。鳥居龍蔵は沖縄へ調査に行っています。そして、そこで出会った土器を縄文土器だというのです。なぜなら沖縄の土器には突起があるからと。それを証拠とするのです。その突起も実は中期縄文の大仰な突起ではなくて慎ましやかなものです。ちょん、ちょん、ちょん、ちょん、と 4 つ付いた突起です。それを鳥居龍蔵は見逃さなかった。突起があるから縄文文化だと言うのです。最近の研究者は一生懸命に考古学をやっています。だから、やっていくと共通性も見えるけれども、むしろそれぞれの違いや個性、そういうものを見つけることにと喜びを感じます。やっているうちに、沖縄のいろいろな文化遺物は縄文ではない、縄文と違う要素もあるではないかと、違いを並べ立てて沖縄を縄文から外そうとしています。そういう考え方も一方ではあってかまいません。けれども、土器に突起があることに目聡く気づき、それを縄文の特色と考えた鳥居龍蔵の業績は改めて評価すべきです。そして、私は鳥居龍蔵の見解に賛同します。土器そのものを見て済ますのではなく、その後に見えると縄文世界に普及していた観念が重要なのです。

縄文世界の観念を考えるうえで、先に触れた第二の道具のひとつに注目してみましょう。縄文人はサメの歯を特別視しています。サメの歯の形に整えた土製品や石製品を作ります。時に孔を穿ち耳飾りや首飾りにしています。それこそが縄文的観念です。そのような縄文的観念に由来する第二の道具が沖縄にもあるのです。沖縄は本州よりもサメとの関係が近しいくらいです。いくらでも本物のサメの歯が手に入ります。けれども、縄文の世界の一員ですから、縄文の流儀をそのまま踏襲し、石で作ったサメの歯形の製品を持つのです。このように見ていくと、縄文の世界は、ちょうど日本の国が今おさまっている日本列島を土台にしているかのようです。縄文文化はそこに重なっているのです。

土器の突起ですが、縄文時代と同じ年代の朝鮮半島では見られません。朝鮮半島にも土器がたくさん残っています。縄文と同じ頃、膨大な量の土器を作っている証拠です。けれども、突起はありません。口縁は平らです。また、ロシア極東沿海州でも土器は作られています。しかし、口縁は平らで、突起はありません。縄文人のように、土器には突起を作らなければならないという、その考え方の外にあるわけです。

土器の突起を機能と切り離したデザインの面から見ていくと、もしデザインとしておもしろく感じていれば少しは真似する人たちが出てきても良いと思うのですが、デザインだけでは人の心は動かないのです。そこに意味があって名前があるから、名前とともに意味があるから、それを受け入れる土器が受け入れられ、同じ世界を入るわけです。朝鮮半島の土器に突起がないという事実は、そこが違うということです。縄文世界ではない。先ほど申しました縄文世界をつくる第二の道具もない。そういうふうに見ていくと、縄文文化の埒外なのです。ロシア極東沿海州にもない。中国大陸の同年代の土器にも突起はありません。日本列島の場合は、縄文時代が終わって弥生時代に入ると、もう土器に突起はありません。そして、今の我々の器に至るまで継承されている形になる。挙句の果てがタッパーウエアのようなコンテナ容器です。タッパーウエアのようなコンテナ容器には突起がない。あれは器の機能をとことん追求したものです。器の機能を何の無駄もなく体現しているからといって、あれが食卓に並んでいたらどうでしょう。味気ない。それと対極にあって、そうじゃないのが縄文文化なのです。どう表現したらいいのかちょっと困るのですが、縄文というのは情緒的なのです。機能を追求したような形で済まさないのです。縄文の文化は面白いです。縄文の文化のいろいろな想いを重ねていった土器の典型を、火焔型土器と王冠型土器に見ることができます。

縄文土器が単なる器ではないことを、火焔型土器と王冠型土器はよく物語っています。火焔型土器と王冠型土器は、越後佐渡の火炎土器様式の二型式です。火焔型土器は、口縁に大仰な突起があります。この形がニワトリのトサカに似ているので、鶏頭冠突起と呼んでいます。鶏頭冠突起の真ん中にはハート形の窓が開いています。鶏頭冠突起と鶏頭冠突起の間にはポケットみたいなものが付いています。袋状突起と呼んでいます。鶏頭冠突起の直下にはトンボ眼鏡と名付けている突起があります。そして土器の口縁には、鶏頭冠突起の縁と同様の鋸歯状のフリルが付きます。火焔型土器には、鋸歯状のフリルが必ず付きます。絶対に欠かされないものです。一方、王冠型土器の口縁部には鋸

歯状のフリルはありません。口縁は波打っていて、その波頂に抉りのある短冊形の突起が付きます。

火焔型土器を見て、なんとなくすごい形だなと思われるでしょうが、その姿かたちは鶏頭冠その他の必ず付くべきもので構成され、表現されていることが重要なのです。昔ばなし「桃太郎」を思い出してみてください。火焔型土器はそれと同じなのです。昔ばなし桃太郎になぞらえて、火焔型土器を見てみると理解しやすいでしょう。鶏頭冠突起、目立つ鶏頭冠突起はもちろんモモタロウさんです。鶏頭冠突起のハート形窓は最初に寄り従うイヌさんです。その下にあるトンボ眼鏡はサルさんです。袋状突起はキジさんです。口縁の鋸歯状フリルはオジイさんとオバアさんです。そこまで説明したら、わかるでしょうが、このような見立てをすれば、火焔型土器には桃太郎という昔ばなしが隠されているのです。隠されているというか、それを単純に表現しようとしています。ただ、これは喩えですので、今の私たちには火焔型土器の表現する具体的な物語はわかりません。しかしながら、今のように説明すれば、なるほど縄文土器はなんとなく単なる容器ではない、なんとなく似た土器というようなことはない、もっとちゃんとした内容がここに盛り込まれていることがわかります。

同じように、鶏頭冠突起を下高井戸駅、ハート形の窓を3月10日午後1時30分、トンボ眼鏡を坂詰秀一先生、袋状突起を日本文化財保護協会、口縁の鋸歯状フリルを日本大学・文理学部校舎というようになぞらえたとき、それらを読む順番を知っていれば、下高井戸駅下車、3月10日午後1時30分から、坂詰秀一先生の話を聴く会が日本文化財保護協会主催で日本大学・文理学部校舎を会場に行われるというメッセージが伝わることになります。そこから坂詰秀一先生を指すトンボ眼鏡除くと、なんのための集まるのか意味が通らなくなります。あるいは袋状突起を取り除くと、日本文化財保護協会が主催するという重要な情報が盛り込まれなくなります。すべてをそろって表現するから、そのメッセージが伝わるわけです。縄文土器はそのように作られているのです。

つい先日も同様の説明をしたのですが、縄文土器に表現されている物語を、我々はなかなか具体的にはわかり得ないのです。わからないことをわかると言う人もいるのですが、それは信用できないだろうと思います。その先日の会合でも聴講者のみなさんに問いかけたのですが、江戸時代初期の柄鏡があります。鏡の背面画には農夫が表現されています。その腰には鎌を差し、手をかざしてお月様を見ています。これはのどかな田園風景の一コマか、図案も良いしなかなかだなあと感想を漏らす方もいるかと思います。ところがこの図案が含意する物語は全くのどかなものではありません。この時代に生きた人ならば、多くの人が知っていたはずですが、この図案は「木賊刈」という謡曲を題材モチーフにしています。人さらいが昔いたのです。私が子供のころは悪いことをすると、人さらいがやってくると脅かされたものです。今はそんなことを誰も言いませんが、この図案のモチーフはそういう謡曲なのです。木賊がいっぱい生えています。木賊は研磨材になる植物です。その木賊を村はずれの丘の上で刈っているのです。村はずれで、いつかさらわれた息子が戻ってくるかもしれない。人さらいにあっていない、だから戻ってくるに違いないと思い、村はずれの小高い丘で木賊刈りをし、息子の帰りを待っているのです。しかし、今日も戻ってこなかった、いつの間にか今日も一日が終わり、月だけが戻ってきた。恨めしそうにそれを眺めているわけです。現代では。これを読み取れる人はそういないはずです。私以外は。私の話を聞いた人はわかるかもしれませんが。それと同じように題材モチーフを知らないと理解できない柄鏡の図案に南天があります。意外と植物の南天を表現した柄鏡は多くあります。何故でしょうか。南天は「難を転ずる」に掛けられていました。柄鏡の図案に南天があるのは、「難を転ずる」まじないなのです。だから植物の南天を画で表現せず、漢字で「南天」と文字で表現しているものもあります。南天とともにゾウさんみたいな生き物が描かれている場合があります。風変わりな獣がいるものです。だから奇獣と呼びます。このような図案の柄鏡を某大学の報告書では2頁にわたって説明していました。変な動物がいるということで。しかし、そうじゃないのです。これは貘（バク）に決まっています。南天に貘は定型的モチーフなのです。南天は難を転じ、貘（バク）は悪夢を食べてくれるのです。それを知っておかないと、表現されたものは読み解けないのです。

私は火焔型土器を昔ばなし桃太郎や、きょうの講演会開催情報になぞらえて説明しましたが、火焔型土器にはそういう意味が託されている解読したわけではないのです。ところが、佐原眞さんは「小林くん、君は物語が潜んでいるというけど、どういう物語なのか。それを言え言え」というのです。そんなこと言えっこありませんと言って、いつも物別れになっていました。尊敬する佐原眞さんに、一つ二つ反抗した中の一つです。それでも彼は許さない。「そうじゃなければ私は反対する。物語などないと言え。意味はあるけれども物語ではない。」とか変な理屈をこねて僕を負かそうとしました。けれども、これは火を見るより明らか、僕の

勝ちです。

もう少し、同じような例を挙げます。銅鐸の描画です。あれを読み解こうとした最初の具体的な作業は小林行雄大先生によるものです。それを受けて佐原眞さんがやっていました。そして、負けじと、同じことをやろうとして、今も健在なのが春成秀爾さんです。さっきの木賊刈も読み取れない事態が発生するのに、あそこにトンボがいる、ウソをついている女がいる、シカが出てくる、それを想像たくましくして、こういう物語が表現されている。誰が言えますか。それは考古学ではないのと私は思います。遊びなのです。息抜きに遊ぶのは認めますけれど、あれを大事な研究テーマの一つとすることは考古学でない。私は弥生について研究していないけれどもわかるのです。ルートヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインというイギリスの哲学者ですが、彼風に言うなら「論理空間が違う」のです。論理空間が違うところに土足で踏み込んで、現代の論理空間に所属している私の考えで読み解けると思うのが間違いなのです。間違ったことを研究するというのは研究ではないのです。違うことをやらないといけないのです。後ほど坂詰先生から追及されそうなのですが、そういう意味で考古学のありようの一つとして、こんなことをやっていてはだめなのだということの一つが文様を読み取ることです。

縄文の文様の中で出産をしている場面とか、蛟（ミズチ）だとか山椒魚（サンショウウオ）だとか。山椒魚（サンショウウオ）と名前をつけるとそれは山椒魚（サンショウウオ）になってしまうのです。そして山椒魚（サンショウウオ）を描いているのはどういう意味かなんて、山椒魚（サンショウウオ）と縄文人との関わりを復元しようとするグループもいます。先日、中沢新一さんと対談する機会がありました。会った途端に「私がやっていることはいかがわしいと思っているのでしょう」と牽制されました。彼は諏訪湖と縄文人について語っています。中沢新一さんはものすごい勉強家です。その解釈は人類学と民俗学と双方の見地からのもので、それで縄文を読み取ろうとしている。そういう人がこれは蛟（ミズチ）であるとか、山椒魚（サンショウウオ）であるとか、そういうふうに解釈をひろめることは、どんなにその人の実績があろうと、縄文土器について、そういうことを言うのは許されないだろうと思います。少なくとも私自身の時間もなくなってきました。今日の時間じゃなくて、もっと大きな時間がなくなりつつあるのですけれど、ああいうことは駄目なのです。努力すればわかるかもしれないという期待を持つことがまず無駄です。努力してもわからないから、そのことについては避けて通ろうとして、別のことを研究すればと思います。それは大賛成です。

さて、話を戻します。火焔型土器と王冠型土器は縄文を象徴する存在です。なぜ、縄文文化を象徴するものと言えるか。火焔型土器と王冠型土器、ちょっと紹介したように、この二つはどちらもすごい造形です。火焔型土器という造形を縄文人が手にした。もうこれで十分、これでいいじゃないですか。これだけ立派なものができたのだからと満足してもおかしくありません。きっと現代の陶芸家には、こんなものを思いつきません。ところが大同小異の違うものをさらに造形します。それが王冠型土器です。火焔型土器と似ていて、かけらだけでは区別がつかないのです。なぜなら器形や器面の文様は火焔型方土器とほとんど違いません。それでも火炎土器様式の中に、火焔型土器一つではなく、火焔型土器と大同小異の王冠型土器をつくり、二つ用意しなければいけないという彼らの考えがあるのです。これを私は「二つ一つの縄文思想」あるいは「二つ一つの縄文哲学」と呼んでいます。二つは対立的です。王冠型土器は口縁が波打ち湾曲しています。対して火焔形土器の口縁は水平です。これは絶対に守っている。そして、突起が違います。火焔型土器の鶏頭冠突起に対して、王冠型土器は短冊形突起です。火焔型土器と王冠型土器とは、口縁のかたち、突起のかたちが二つそれぞれに異なるわけです。また視点を変えて、火焔型土器の上面観と王冠型土器の上面観を比べると、火焔型土器は円形で、王冠型は方形です。

同じように土器の上面観に違いを見せる例は多いです。代表的な事例に鹿児島県霧島市の上野原遺跡の早期縄文土器があります。この地域の早期縄文土器には壺があり、大同小異の壺形土器が二つ並んで埋けられたような状況で出土しました。なんで二つ必要だったのか。二つの壺形土器の口縁、一つは円形で、一つは方形なのです。二つあって一つを表しているとみる所以です。

二項対立の観念があって、二項をあわせて全体をなす。二項対立の観念は、いろいろな自然民族にありますが、私が強調したいのは、二項対立だけではなくて、二項対立が二つに分けるだけでなく、二つがそろって一つという観念です。火焔型土器と王冠型土器。あるいは円形と方形。それは紙の表と裏みたいなものです。表と裏があって、表は表で独立して主体性を持っている。裏は裏で主体性を持っている。でも表と裏があって、はじめてのひとつの存在になる。ちゃんと対になっている二つで一つのものという考え方です。人類の認知能力は、二項対立的な考えを基盤にしていて、いろいろな自然民族に、二項対立の概念が見られます。夜と昼、女と男、痛いと痒い、赤と黒などです。

赤と黒という二項対立的な概念は、縄文人にも見られ、いろいろなところで、それを表現しています。ただし、縄文人は、赤と黒、火焔型土器と王冠型土器、それらが二項対立的であり、かつ紙の表と表のように反（はん）の関係でもあり、それぞれが独立しています。それぞれが主体性を持ち、裏でもないし表でもないのです。これが縄文人にとって土器を赤と黒に塗り分ける差です。同型同大、あるいは大同小異で、すぐそばから赤と黒に塗り分けた土器が二つ組み合わさって出土します。一つではなくて二つです。単純な二項対立ではなく、二項対立の二つで一つの大きなものを表しているわけです。同様の指摘を、私は今のところ他に見たことがありません。二項対立は中沢新一さんもちゃんと指摘しています。さまざまなところで認められる人類の基本的な思考パターンのひとつです。だけど、それをもう少し詳しく見ると、二つ一つでひとつのことを理解している。二つ一つの縄文思想に基づく認識の仕方が特に重要な意味をもっていることに気づくわけです。一枚の紙は、裏と表であり、紙は紙です。それぞれ独立した二つで一つです。一日は、昼と夜であり、一日は一日です。昼は昼、夜は夜、別々なのです。それでいて昼と夜が一方で一日という概念とちゃんと結びつく。そんなありようです。後期縄文、北海道八雲町野田生１遺跡の竪穴住居には、赤漆で全体を塗られた素晴らしい土器の近くに、黒く塗られた土器があります。赤と黒です。赤と黒が二つ一つの縄文思想の現れということに思いが及んでいないので、赤漆塗りの土器だけを写真に撮る。黒い土器だけで写真を撮る。それぞれ赤は赤、黒は黒、それぞれ良い土器で、良い写真になりますが、赤く塗られた土器と黒い土器、二つ一つで見つかることに目を向けると、赤と黒という色の異なる土器は少し見え方が変わってくるはずです。

さて、そろそろ時間ですので、縄文土器について、まだまだ語りたいことはあるのですが、これくらいにしておきます。縄文土器が縄文文化を代表する象徴的な存在だという事はわかっていただけたのではないかと思います。繰り返しになりますが、縄文土器は単なる器ではない。縄文土器は縄文文化の中での意味を持っている。だからこそ、縄文土器を今日の話の中心に据えたのです。

時間が減ってきましたけれども、最後に縄文人のムラについて触れます。縄文人のムラは、その周りがハラで囲まれていたと考えます。ムラの周りがハラです。ハラ、これは縄文人に特有の自然との関係です。ムラは人工的なスペースです。対してハラは、自然の秩序が維持されている空間です。縄文のムラの周りには、いつもハラが広がっているのです。ムラとハラとの関係はとても大事なことなのですが、それが一万年以上続きました。そうやって自然と共存共生しているのです。けれどもユーラシア大陸の東西、大陸側のムラはいわゆる農耕とともにムラを軌道に乗っていくわけです。そのために大陸側のムラの周囲はノラになります。野良仕事のノラ。縄文ムラの周りがハラ、原っぱのハラであることと対称的で大きな違いです。原っぱのハラは、ムラの周りにありました。それは遊休地となって、そのままで終わらないところです。ノラに対抗する歴史を繰り広げた舞台でした。言い換えると縄文人はムラとハラをもって、自然と共存共生させてきた。そのような一万年以上の歴史を大陸側のムラは持っていないのです。大陸側のムラは、ムラとノラとの関係、そしてノラをどんどん追い詰めてゆく関係です。縄文は、ハラを一方的に略奪しないで、そのままの自然的世界に近く留めておこうという考え方です。縄文のムラとハラ、このような関係性は日本列島の歴史にしかない経験なのです。一万年以上にわたる期間です。その一万年以上に及ぶ縄文人の文化的経験は、大陸側にはありません。だから、彼らは平気で一気呵成に自然を征服しながら今日まできたわけです。そして、今、自然を破壊するとか自然を汚染する、科学的観測結果によればオゾン層が破壊される、そういう状況になって、なお、それを止めることができない。

日本文化は注目すべき特色を持っています。欧米は日本文化に関心を寄せます。欧米の大学には日本学研究所の設けられているところがけっこうあります。ものすごい施設です。日本学研究所だけで宿泊施設も持っているし、日本語がペラペラで自在に読み書きができるような人たちが大勢所属しています。それほどのことを向こうの人がやるほどに日本文化には特殊性があるわけです。非常に興味深い存在なのです。なぜかといえば、日本文化は縄文の一万年以上の経験を持っているからです。大陸側にそれはないからです。だから大陸側の文化と日本の文化とは全く違うのです。私はそういう違いは、文化的遺伝子によって継承され続けていると考えています。肉体はＤＮＡによって遺伝的に継承されています。そうじゃないものも継承されるのだ、それを文化的遺伝子と私は考えています。ある時はっと思いました。それは言葉であると。リチャード・ドーキンスという『利己的な遺伝子』という世界的ベストセラーで有名な生物学者がいます。彼は文化的なものも継承されるのだという見通しを述べ、ミームという概念を提案しています。しかし、その実態について説明はありません。私は言語こそが文化的遺伝子ミームの正体だろうと見通しています。

日本は他の言語と比べて非常に特殊な存在です。「お前、何食べる」「俺は天丼」「俺はきつね」「俺はたぬき」「じゃあ、お前は」「私はうなぎだ」このような表現は日本語でしか成り立ちません。ただ主語、述語、目的語を並べればできるというものではないのです。日本語では、「私はうなぎだ」と言えば通じますが、英語やフランス語でそういった表現はそもそもありえないのです。それが日本語の特殊性です。

私が子供の頃、日本語はウラル・アルタイ語系言語だと教わりましたが、言語の本質を見誤るおそれがあります。ノーム・チョムスキーという人を知っていますね。彼は言語学者で、基本文法、生成文法を人類の脳は最初から備え、それを駆使することができる能力が生得的に存在すると仮説を示しました。

言語というのは世界中どんなところでも使われています。ホモ・サピエンスのみならず、幸島のサル、丹波篠山のサル、下北半島のサル（北限のニホンザル）も言語をもっています。それぞれは互いに会ったこともない集団同士で、それぞれに言語を使っています。ヒトに比べれば語彙も少なく、言語と呼べないほどですが、それでもサルも言葉を操る。人類の言語もそうなのです。世界中に6,500から7,000ほどの言語があると言われています。絶滅しようとしている言語が多く、言語多様性を保全する取り組みが進められています。そういうあり方からいえば、どこかから言葉がやって来たのではないと考えるべきです。仲良くしていただいた大野晋先生は、弥生時代になると、はるばる南インドから言語がやってくるといいます。筋斗雲家かなにかに乗って。まだジェット機も開発されていないのに。そういう考え方なのです。そうではなく、言葉は最初からそこにあったとみるべきしょう。日本列島の縄文はそれだけの力を持っていたはずです。そういうふうに考えると、縄文人は言葉をちゃんと話していて、ムラとハラとが共存共生する活動をしていた。縄文人は、縄文人同士が言語活動をしていた。それと同じレベルで、縄文人は自然との関わりを言語で表現していたと考えます。そこにオノマトペが生まれるのです。オノマトペとは擬音語、擬声語、擬態語のことです。春の小川はサラサラ流れる。そう決まっていると、今みんな思っているはずです。風はソヨソヨ。じーっと顔を見る。見つめられることに、いい思い出を持っている人もいるかもしれないけれども、「じーっと」なんていう表現は、日本語のほかにお目にかかりません。「じーっと」は、ひとつところに焦点を定め、目をそらすことなく眺め続けた、なんて「じーっと」と説明されるわけです。

他言語もオノマトペを持っていますけれども、日本語ほどに豊かではない。それひとつとっても、一万年以上の縄文から引き継がれてきた文化的遺伝子としての言語が浮かび上がってきます。大陸側の人たちが経験しなかったこと、ムラとハラとの関係性を通して、縄文人だけの蓄積した一万年以上の経験、自然との共存共生の長い体験が膨大なオノマトペ、現代の日本語には残っているのです。言語を文化的遺伝子として、現代日本へとつながっているのです。

私は縄文の自然との共存共生という表現をそろそろ止めにしたほうがよいと考えています。共存共生という表現は生態学的な意味合いに引きずられそうです。それに代わって「共感共鳴」と言いたい。縄文人は自然と共感共鳴する関係だった。大陸側のムラとノラ、ハラこそが一面的な共存共生だった。日本、縄文の文化はそうじゃない。共感共鳴です。そして、そのような精神の一部が現代日本文化の中に垣間見えるわけです。俳句はそのひとつです。俳句には季語があります。そういうことが好きでたまらない。自分では下手だとわかっている。わかりやすく言うための表現が乏しく、失礼な表現になるかもしれませんが、下手な俳句でも良いのです。みんな、俳句をひねろうとするじゃないですか。やらない人でも、僕のように俳句が好きな人は多い。俳句は自然との対話です。短歌とは違います。短歌は色恋沙汰とかいろいろな要素が含まれます。サラダ記念日も出てきます。だけど俳句にサラダ記念日はない。それは俳句を通して、そういうことを表現しないからです。だから、縄文人の文化的遺伝子がずっと現代までつながっている証左に、俳句を挙げられるわけです。

現代日本へと続く文化的遺伝子には、縄文人が自然と共感共鳴した経験が刻み込まれています。だからこそ、縄文文化が世界遺産に入って当然だという考えがあり、縄文文化の内容は十二分な権利を持っていると主張するのです。これがうまくいかないとすれば、縄文文化に対する無理解な人びとが周りにいて、縄文文化を理解しない世間があるということにほかなりません。一方、そういう世間を、周りの人びとを育ててしまった縄文研究者の責任なのです。

ちょうど時間になりました。これで終わります。ありがとうございました。

対談「小林先生に聞く・考古学の未来」

小林達雄・坂詰秀一

［坂詰］

小林先生が大変おもしろいお話をされて皆さん堪能されたのではないかと思います。今日は私が小林先生に質問する方向でお話をしてもらいたいと考えました。小林先生のことは皆さんご存知だと思うのですが、『縄文の思考』（2008、ちくま新書）が大変評判でして、考古学をやっている人以外にもよく読まれています。最近どのくらい版を重ねているかと思って見たら 3 版、いや 4 版です。

『縄文の思考』という題でお話いただきました。お読みになった方にとっても、小林先生に直にお話をいただいたことが有意義であったのではないかと思います。すでに皆さんご案内のように小林先生は縄文土器の研究で大変大きな業績を残されていらっしゃいます。小林先生の仕事の中で注目されているのが、例えば、『縄文土器大観』全 4 巻(1988～1989)、『縄文土器の研究』(1994)、さらに 2008 年に多くの人の協力のもとにつくりあげました『総覧縄文土器』。この本は協力した人が 169 名、大変な数ですね。A4 版で 1322 ページ、片手では持てません。

こういう縄文土器の研究を踏まえての縄文人全般についての思考を伺いたいと思います。特に最近は『縄文人の世界』(1996)から始まりまして、1999 年には『縄文人の文化力』、さらに『縄文人追跡』(2000)が大変評判ですが、この本が最近ちくま文庫に収められました。今日お伺いしたらもう絶版だと。もし『縄文人追跡』があったら、お求めになったほうが良いと思います。絶版だそうですから。

このように縄文土器の最先端の研究をずっとおやりになり、さらにそれを集大成された。今日のお話でも分かりますように縄文土器文化全体を踏まえた縄文人の生活状態を研究されてきました。國學院大學の 2008 年 1 月 15 日の最終講義で「縄文人の哲学思想」の題でお話されました。大学の最終講義、先生にとって総括を掲げられた講義だったと思うのです。まさに研究の到達点をまとめられたのだなあという気がいたしました。

今までの縄文研究は縄文土器の研究から始まりました。縄文土器の時代文化を研究する方が多かったと思います。そういう考え方に対して小林先生は縄文文化という研究は今後どういう方向で行くべきなのか、今までの長い研究の歴史を踏まえ、今後の縄文文化の研究はいかにあるべきか、ということを先生に語っていただきたいと思います。よろしくお願いします。

［小林］

坂詰先生が「問う」という形では少しバランスが良くないかと思っていたのですが、「問う」ではなく「問い詰める」と聞こえてしょうがないです。考古学の研究者は職人でなければならない、職人であるべきだ、と言うのです。いかにも日本の考古学に携わっている我々を含めて仲間はついつい職人になってしまっているような気がします。土器もどんな細かい欠片でも何々式だとわかるような人が日本で縄文をやっていると言ったら、そういう人がたくさんいるわけです。あるいは、何々式のこの様式についてはこの人が一番詳しいとか。私は 3 つしか時代の新旧を区別していないのに、称名寺式土器のように縄文時代の中期の終わりから後期の初頭にかけての 9 段階くらいに分ける人もいます。それを傍から見れば、職人だなと思いますけれど、果たしてそれで良いのか。私も実は職人芸としてたくさんやってきました。今日ここに懐かしい顔が揃っていてとてもうれしいのですが、あちこち飛びながら、どこまで坂詰さんの問いに応えられるか心もとないのですがそれをお許しください。まともにぶつかってたら、すぐにお手上げになってしまいかねないので、あちこち飛びたいと思います。

私が本当に考古学をやろうと思ったのは大学院を出てからです。ちょうど多摩ニュータウンの建設計画があって事前に調査をするというのを担当しました。その時一緒にやってくださったのは加藤晋平さんです。加藤晋平さんに多摩ニュータウンをやるようにと言って勧めた当人は当時文化財保護委員会にいた田村晃一さんです。私は國學院出身なのですが國學院の中では、なかなかちゃんとした場が持てなくて、周りの人たちを集めては渋谷の喫茶店で話したり、そういう時代で

したが、山内清男大先生の世代に接することができたことと、芹沢長介先生に師事することができた経験はとても幸せでした。そうしているうちに多摩ニュータウンが始まって、芹沢長介先生に紹介されて坪井清足先生に挨拶に行ったら口頭試問みたいに色々と問い詰められて、嫌な男だなあと思ったのですが、なんとか合格しまして、加藤晋平さんと組んでやりなさいと私の道を一つ開けてくださったのです。その頃、うちの大学の人だけではなくて、今日みえている日大だとか明治だとか駒澤だとかの若い人たち、まだ職も無い時代でした。みんな集まってくれて、多摩ニュータウンに取り組むことになりました。私の人生にとってとても幸せな仲間に恵まれた時代でした。その時大事だったのは網野善彦が言う「職人としての考古学」。これは徹底しなければいけない。今でもどういう成果が出るかという見通しの無いままに土器の欠片を拓本に取ってそれをパンチカードに貼り付けてソーシングしてと、まだパソコンの無い時代ですからそういうことをやりました。

何か新しいことを思いつくと、調査が終わってから誰かの下宿に転がり込んで肉を焼いたりしながら情報交換というと聞こえがいいのですが、ただ飲んで時間を過ごすという、しかしそれもまた楽しいことでした。そして今思うとその時集まってくれた人たちはその後一騎当千になっていったすばらしい人たちでした。そうやって私も職人芸としてやりましたけれどもそれより前に千葉県の野田市にある三昧時貝塚という貝塚の発掘に参加したことがあります。私が掘っていたらカチっと当たりました。運の良いことに注口土器にあたったのです。注口土器に当たって少しずつ泥をよけていくうちにこれは注口土器だと思いつきました。それが私の土器の研究の重要な意味を持つ出発点となりました。それまでの縄文土器の研究はみんな欠片で研究していたのです。欠片を分類して縄が右撚りだ左撚りだのと一生懸命やりながら何をやるかと言ったらこの地方に今まで無かったような土器が見つかったということが第一。それが一番重要なモチーフだったのです。

その次は時代がどの時代とどの時代の間にくる型式であるとかいう時代の変遷を新たに自分で構築してそれを発表する、それが常態でした。もちろんそれともう一つがルーツの問題です。ちょっと曝露することがあります。そういうことについて詳しいのは山内先生をおいて無いのです。その当時から山内先生の縄文土器学について、いろいろ、いかがなものか、問題があるのではないか、土器だけやって何になるのだという声が幾度も幾度も出てきては沈んでいったという時代でした。その頃、私は暇さえあれば今みたいに大学で出席しなければ駄目だということはなかったのです。だから出席しないでいいという授業を自分で決めたのです。その時は山内先生のところに行ったり芹沢先生の所に行ったりしてそして余った時間は仲間と語らっていました。そういうことが通った時代でした。皆さんはそういった年齢の方もいらっしゃるかもしれませんが私より10くらい若いとそういう時代は過去のものとなっていたと思います。

どういうことかというと、山内先生は欠片でも何でも良いのです。そういうものを先生のところに持っていくとこれは飛騨のどの時期のどういう土器だと先生の中に位置づけができます。これは佐渡のこういう土器だと能登の総合調査の時に見つかっていたこの土器と関係があるとか、あの人はものすごく頭の良い天才的な人です。みんなそれを彼の頭の中で整理しているのです。問題はここなのです。みんなにそれをやらせるのです。やらせるというのはどういうことかと言うと、何か見つかったら自分の所に持ってこいと言うのです。そしたら教えてやる。そういう対応の仕方なのです。だから新しい土器、今まで見たことのないような土器と出会うと一生懸命山内先生の所に行って見てもらう。そうすると先生が褒めてくれる。おお、ようやくこの地方に出てきたな、あると思ったんだよ、というようなことなのです。山内先生の人柄もそうなのです。本当に愛すべき人柄なのです。天才なのに狂人的なところがあって、いくつも僕も経験していますが今日はその話は抜きにしておきます。そうやって先生はいつも資料を持ってくるのを待っているのです。持っていくと自分の頭の中に体系ができるのです。

先生は決して土器だけやれば事が済むとは爪の垢ほども思っていないのです。もっと大事なことは文化だと思っているのです。ところが先生に会って話を聞く人たちは山内先生から見ると少し見下されているのです。この人たちに土器をやらないでもっと大事な文化をやれだとか、この土器を残した人間について考えないと駄目だぞなどとそういう難しいことは言わないのです。宿題は出さないのです。褒めているだけ。褒めていると集まってくる資料で先生ご自身の体系はどんどん固まってくるのです。だからずるいと言えばずるいのですが、そうでした。それはもうはっきりしていました。本当にそのままだと思って、みんな山内は縄文土器ばかり研究している、それは考古学にとって本当に必要なものか、いつまで土器をやるんだという声があちこちで上がってきます。それでもしらんぷりしています。

その山内の土器学に火の手を上げた人は藤森栄一です。そういう人はみんなそうです。樋口清之なんかもそうです。そうなんですけれども、考古学は職人である。さらに考古学と言うのは典型的に職人芸の要素を

含んでいるものですから、そういう職人芸の中には文化を考えるなんていう余地が無いと言いますか能力を超えているのです。ここがミソでして山内先生は自分の所に集まってくる人が文化なんかに手を出して考えるなんてことができないと踏んでいるのです。今になって思うと、ずるいなあ、先生は、そういうことだったのだと、そうやっていいのを見つけてきたと言ってやってこられたのが山内清男だったのです。

当時、縄文三羽烏といって八幡一郎、甲野勇さんこの 3 人がおられるのですがそれぞれ違います。山内清男は土器だけやっている、と思わせている、あるいは思われていたのです。だけど山内先生側は甲野勇さんが文化のことについて色々と考えているということで甲野勇さんに対しても一目置いているのです。八幡一郎は少し自分寄りなのです。山内寄りだからすごくいじわるするのです。八幡一郎は結構バランスが良くて土器もやれば甲野勇さん的な文化もやっていたのです。だから三者三様なのですがどちらかというと山内ご本人に近いのは八幡一郎だからいじわるをします。同じ机を二人で使っていた時があるのです。朝行くと対面に八幡一郎がいて、八幡一郎が帰ってから 5mm くらい押すのです。10 回それをやられると 5cm になります。気が付いたらものすごく侵略されています。そうやって、いたたまれなくするのです。それほどまでに、こうと決めたらこうと、山内清男はそういう人です。そういう人で緻密に土器を見ていて自分で体系を立てていくときに自分一人では集めきれない資料は。北海道から九州までそういうところでやっている考古少年とか考古少年上りが見つけてきたものを見て判定している。君、考古学をやるなら考古学は土器じゃないよ、なんてことは一言も言わないのです。だけど先生は頭の中ではそう考えています。

そういう意味では、渡辺仁先生がおられます。渡辺仁先生が山内先生のところに出入りしていました。渡辺先生がアイヌのことについて興味を持って進むという時に相談に来るのです。その時、山内先生はご自分の蔵書の中からたっぷりとアイヌ関係のことを持っているのです。それを風呂敷包みに入れて持ってきて教室でそれをひけらかしていました。この人にはこれをやらせてもいいというのがわかっていたのです。我々雑魚は土器を一生懸命やれと。僕なんかはいいように使われて、先生は資料を集めていて、資料の写真を引き伸ばさないといけないのです。その引き伸ばしは僕がやっていたのです。暗室に入って。山内先生にいた私的助手として高校出の女の子を雇ったのですが、一緒に暗室に入っていると何の前触れもなく入ってきてチェックをするのです。そう思い込むとたまらないみたいですね。用も無いのに入ってくる。何のことはないと出ていく。小林なら今のところは安全だというのを何回も確認されました。

山内清男先生は東京大学の人類学教室におられたのです。3 階です。3 階に外国からの本もみんなそこに集まるのです。図書室があったから。その図書室に集まる外国からの本は全部山内清男が目を通すのです。他の誰もそんなことをしていません。たぶん縄を転がす文様施文のことについては山内清男が縄文土器で発見しましたけれども、アフリカの部族が縄を転がしているというのは雑誌『マン』に出ていたのです。それを山内清男先生が見ているに決まっているのです。だから芹沢長介先生があれはそこからヒントを得たのではないかと。山内支持派は目の敵のようにして芹沢長介を叩きました。だけど私も冷静に考えるとその可能性は極めて高いと思っています。その状況証拠をお話します。勝手に思いついたのではないです。

山内清男をこの中にもご存知の方は何人かはおられると思いますが、ものすごく出典だとかオリジナリティーを大事にする人なのです。少しでも自分がお考えになっていると山内から教わったと書いていないとものすごく攻撃するのです。他の人に対しても、誰がそう考えたのかとか、引用文献について厳しいのです。厳しいのだけれども山内清男先生を見ていると、縄文土器の縄文の転がし方については一言も触れていない。それは異常です。そういう意味で間違っていると言うのですが、私のようなぼんくらでも、どうもあやしいなと。だからと言って低い業績では無いのです。ものすごく高い。その縄が転がされているんだということを発表する前は、発表といってもちゃんとした形で発表していないのです。だけど、それを言う前に、『史前學雑誌』で縄文土器について、縄文後期の撚糸文を中心として分類しているのです。ものすごく精緻な分類をしております。誰にもできません。そういうものをやっている。だからものすごく勉強しています。それをエピソードとしてお話しておきましょう。山内先生

の業績が貶められるようなことまで私は言おうとしているのではないです。そんなことは全く無関係なのですが、それについては考えさせられるものがあるということです。

それはそれとして、私も長らく土器の研究を続けてきました。そうすると、山内清男先生ととてもよく似た姿勢を取る人がいるのです。それが柳田國男です。柳田國男の蔵書は成城大学にものすごい量があります。欧米の原書もたくさんあるのです。その柳田國男が最後大勢の弟子を従えてやったことは、昔話の採集です。みんな柳田先生に言われて、こういう昔話がありましたといって持っていくと、よしよし良い話が見つかったね、と言って取り入れて結集するのです。それはちょうど山内清男的なスタンスであった。だからちょっとライバルになると柳田國男は疎んじるのです。

その頃、考古学にも興味を持つし民俗学にも歴史学的な近世のものにもちゃんと研究した在野の一志茂樹先生がいます。その発表の場は『信濃』という雑誌です。今も続いています。その一志茂樹先生の研究というのはいわゆる文化人類学的なイメージで良いのですが、柳田國男に疎んじられました。全体の文化を観察して一人だけで研究しようとするのですね。柳田國男にはそういうところがあるのです。宮崎県で研究した村の歴史などまもなく資料があふれてくるとその資料をさらに集めて既存にあるような物語に復元していって日本全体の中の位置づけをやっていくのです。それを知って私は山内清男の民俗版を見たと思いました。これが今までの私の経験でした。それから、どういう質問でしたか。

［坂詰］

これからの、ご自分の方向を。

［小林］

僕はですね、若い頃は職人芸しかできませんでした。だけど坂詰さんなんか一人狼でずっと頑張ってこられた人なのです。あの頃大学にこういう考古学に係わる講義が 3 つ 4 つあるのかといったらないのです。そういうのは東大とか京都大学とかにあるかもしれないけれど他は無いのです。だからみんな一人狼でやらないといけないのです。そういう中でずっと育ってきた自分の骨格を築き上げてきた一人が坂詰秀一です。

その時代の人間ですから私もそうでした。職人芸的なことはある程度はやりましたけれど、そうじゃなくて土器なら土器で欠片ではなくてちゃんとした土器の研究とは何かと考えるきっかけを与えてくれたのが、戻りますけれども三昧時貝塚で注口土器の完形品に掘り当たった時、これは堀之内１式のもの。堀之内１式だけで良かったのです。その当時の考古学は。これは堀之内１式の注口土器だというのがわかったのです。直感で。それほど勉強もしていないし土器もたくさんは見ていませんが、ちょっと見た限りではそれは注口土器だということがわかって、それから完形品として土器というものを見なければ土器の本当のことはわからないと思い抱きました。

それで自分のことを申し上げる前に、私はそこで形のある縄文土器を研究するには山内先生が唱えた型式一つの概念ではやれない、やるためにはそれだけの武器、考え方というのを持たなければいけないのだということをひしひしと感じて山内先生が使う用語と同じですが概念の異なるタイプ・型式ですね、それからフォーム・形式、それからスタイル・様式。この 3 つがどうしても形あるものの研究に必要だ。これは建築でもそうですけれど、芸術でもそう。形あるものを扱っている学問と言いましょうか。最低この 3 つの概念を持たない学問は無いのです。ところが我が日本考古学は山内先生の仕事である型式の概念一つで全部読み解こうとしていたのです。そうではなくて私はタイプ・フォーム・スタイルというこの 3 つを総合的に見て考えなくてはいけないんだということを提唱したのですが、山内清男の言う型式と小林は概念が違うと。それから小林行雄の言う様式論の様式と小林の様式はまた違うと。違うと言って僕の提案したものは意味が無いとまで言われました。多くの人に。

そしてあろうことか同じ用語、様式とか型式を使うと混乱を招くと。遅れてきた考古学の研究者のくせに混乱を招くとはけしからん。だから用語まるまるそれを使ってはいけないというような雰囲気に追い込まれました。けれども、では遅れてきた人は同じ言葉を、言葉というのはものすごく限定されています、そういう限定された言葉の中で誰かが使った言葉をもう使えないのであればそんなことは困る。おかしいのではないか。だからどんどんそれを使い続けました。依然としていろいろな人が私のタイプ・フォーム・スタイルについて、いわばケチをつける。嫌味を言う。要するにいちゃもんをつける。タイプ・フォーム・スタイルを使う、そういう人がたくさん増えてきても変わらず、今もやっているのです。そして多くの人が先ほどご紹介いただいた『縄文土器総覧』の時にタイプ・フォーム・スタイルというようなものを、改めてそれにのっとって編集してもらうのです。

言いたいのは、それらの概念を提案した私は、私だけが独創的にそれらを頭の中で考え出したことではなくて、当然、考古学の研究の中では取入れなくてはいけないことで、日本だけがすぐ取り入れていないだけだというのが良くわかるのです。ちょっと勉強すれば、日本から目を外に向ければ研究のあり方だって土器の研究だって日本だけが優秀ではないのです。よく、日

本の土器の研究は世界に最たるものだと自分の業績でもないのに、それに乗ってそうだそうだと頷いていたのですが、だいたい基本的なタイプ・フォーム・スタイルを踏まえないで研究なんかできっこありません。それは断言できます。けれども、某国立大学とかの考古学の専門だってそうですけれども、なかなかそれに賛同してくれない。いろんなところでいちゃもんをつけられる。

様式とは、備前焼なら備前焼、よくわかるでしょ、皆さん。焼き物の好きな人は。志野焼なら志野焼、萩焼なら萩焼。伊万里なら伊万里。わかるんですよ。そんなの、欠片でもわかるのです。それが様式なのです。欠片でもわかるけれども、タイプ、これは欠片ではわからないのです。例えば、先ほど堀之内１式の注口土器に出会ったことが私の研究の重要なきっかけになったと話しましたけれども、堀之内１式と判定した基準はその文様、すっきりした細身の深鉢の文様と共通するものです。文様だけで年代を定められる山内先生の型式を判断することはできますが、タイプ・型式の研究はできないのです。さまざまなことがわかる完形品があってタイプ・型式としての研究ができるのです。そして、フォームというのは、徳利（とっくり）、備前焼も志野焼も徳利（とっくり）はと徳利（とっくり）す。徳利（とっくり）はフォーム・形式なのです。スタイル・様式が違ってもフォーム・形式が同じなのです。そういう形に対する分析の見方です。そして、くどかったかもしれませんが、これからの考古学は、今日のような場があれば、少なくともタイプとフォームとスタイルくらいは日本の考古学の中で定着させて欲しいということを言いたいです。

［坂詰］

ありがとうございました。小林先生の方向性を的確に示していただいたと思います。時間の関係もありますので、研究の展望として、縄文語についてお伺いしたいと思います。弥生時代の日本語については先ほどお話にありました大野晋さんはインドからきたとか……。皆さんご存知でしょうか、小泉保さんが『縄文語の発見』(1998)を出されました。小林先生のお仕事にそって縄文語を論じられています。そういうことを考えて、縄文語の研究というのは今後どういう方向でいくのでしょうか。

［小林］

なんと言いますか、考古学を職人芸としてモノを突き詰めていく、もっと分析していく、形をちゃんと理解する、基本的なトレーニング、訓練として必要なのですが、それが得意な、頭の下がる職人芸に師事していただいてと示されていますけれども、問題はその次だと思います。文化といいましょうか、そういうものに入ったこと、ものは研究すれば詳しくなるに決まっているのです。一生懸命やれば、そして次の研究者にまたバトンタッチしていけばわからなかったことも明らかになるに決まっているのです。けれどもそうじゃない部分がいつも残ります。それは彼らの文化そのものです。そういう意味では、坂詰さんのお話の中にもありました。考古学は文化を目標に解明することが大事だ。考古者はシャベルを持った哲学者である。これは含蓄のある言葉だと思います。確かにそこにいかなくちゃいけない。職人芸のまま自分のやっていることを極めていく、それはそれでやらなくちゃいけないのだけれども、そうじゃない時は少し縄文人そのものについて考える。縄文人そのものについて考えるというのはどういうことかと言うと、私にとってみれば、今、身を置いている現代の文化の中に生を受けている、私の人間というものが一体何者なのかということに実は関わってくるのです。例えば、人はどこから来たか、人は何者か、人はどこへ行くのか。これは考古学がそれをやれと言っているのではないです。考古学をやる人が考えなくてはいけないのです。そしてその考えについて目配りをしないといけない、と思います。

私はこれまで考古学そして縄文時代のことをやってきました。これは紛れもない事実でたくさんの時間をそれにかけてきました。けれどそれはどんなにやっても欠片の大きさは何を意味しているのかとか、大きさがどう形成したかとか、地域性がどこに反映されているかとか、竪穴住居の構造は、何を着ていたか、何を食べていたか、それを攻め込んでいくことはできるかもしれないけれども、私はもうそういうことはやっていません。やる暇も無い。するとどういうことかというと、私はやはり縄文人の人間、縄文人たる人間、縄文世界とかなんだとかも言ってきましたけれどもそれを言い換えます。人間としての縄文人というものを明らかにします。我々と同じところもいっぱいあるのです、それから違うところもあるのです。

だいたい土偶を作って引きちぎるなんてことを我々はできないです。土偶を作って、土偶を作ってもらって、ああ上手に出来たと喜んでいる人に、それ壊してください、と言ったことがあるのです。そしたら涙を流してまで反対するのです、嫌だと言って。だけど、このシナリオはそうじゃないのだ、ちゃんと壊してくださいよ。そしたら壊してくれました。だけど泣いてました。そういうものです。土偶というのはそうやって壊されるものがあるのです。ところが、壊されたものは壊されたのではなく壊れたのだと言っている人がいるのです。土偶の勉強はそこでおしまいです。だけど僕は、壊れたものもあるけれども、壊されたものに重要な意味があるんだということを見つけようとして

いるわけです。そうしないと土偶のその先の研究は広がりません。展望は開きません。

けれども、土偶の研究者だと言って、あちこちで何人かの人が自認しているし、他の研究者を認めている人もいますけれども、ほとんど僕の土偶の事についてちゃんと読んでいないのです。少し読んで、俺は小林の言う土偶は女じゃないというのは賛成じゃない、と言う。女じゃないと言う前に、土偶は人の子と一緒、昆虫と一緒なんです。最初卵なんです。草創期の土偶は卵みたいなものです。早期、前期は幼虫なのです。それから蛹になって、そして中期になって成虫・蝶々になるのです。それは人間に例えると、赤ちゃんの時代、それぞれ持ち物は違うけれども女男どっちでもよいのです。女でもない男でもないのです。赤ちゃんなのです。その次にやがて７歳になって席を同じくしないような時代を経て、思春期を迎えて、そして女は女に変身していくのです。そういうのが土偶なのです。そういうことを見ていく必要があるということを書いても、土偶の研究をしている人の研究の中身を見てみると、僕の言うことに全く触れられていません。そして早期の形、前期の形、どこどこ地方の山形土偶とかそういうことを言っている。せっかく道を開いたつもりなのに、後ろを振り返ると誰も僕の土偶の研究に付いてくる人がいないのです。

僕の人徳のせいじゃないんですよ。僕は土偶を研究するとき土偶だけを読んでいるのではないのです。ヨーロッパの土偶も研究しました。研究というか研究成果を読みました。それから、トーテムポールを立てた北米太平洋沿岸のネイティブ・アメリカンは、すごく縄文と似ているところがあって、僕は東西の横綱だと言っているのですが。その東西の横綱の一方、トーテムポールを立てたネイティブ・アメリカンは土偶を持っていません。アイヌも持っていないのです。できる限り目配りして僕の土偶の研究があるのです。僕と同じように時間をかけて土偶の研究をしたと言っている。自認している人たち、本当にやったの？やっていないでしょう。僕はこれからの考古学をやるためには、物の形をやる考古学の職人芸、それはそれでやらなければいけない。やらなくちゃいけないけれどももう一つ、それを残した縄文人の論理空間、土偶というものを手にしてわざわざ作ったものを壊すなんていうのは、ものすごい心の葛藤ですね。押さえつけて爆発させないと駄目なことなのです。そういうことをやっているということの縄文人の存在、というところにいきたいのです。だから私は人間学としての考古学をやりたい。

そして先ほど坂詰さんからいくつかの書いた本についての紹介をしていただきましたが、私は佐原眞さんと対談した『世界史の中の縄文』あれをぜひ皆さんに読んでもらいたい。偉大な佐原眞に、やむにやまれず食ってかかって、妥協しなかったけれども、それを受け入れてくれた。それは私にとって大事なことです。もし、今日の話の中身および僕という変な人間に興味を持ったらあれをのぞいていただけるとありがたいです。

［坂詰］

今お話を聞いて色々なことが頭に浮かんだのですが、私は以前から歴史関係の多くの先生のところに伺ってお話を聞いた経験があります。その先生方が共通して申されるのは、質問をするのは良い、お前が質問をするなら私と同じような勉強をしてから来い、と言うのです。これはもうお会いした先生みんなそうでした。それは日本史・東洋史に限らずです。そこまで勉強して来いと。どういうことかと言いますと、一つの学問を考える場合には過去の先輩の研究が重要なんだと。その積み上げが今の学問を築いている。だから質問するのならば、先輩の論文あるいは説をマスターしてからちゃんと質問せいと。そういう姿勢を持たなければ学問の研究はできない。ということを共通して言われたことを思い出しました。

小林先生は多くの論文をお書きになっていますが、人間としての縄文人を研究するのが目的だとおっしゃっています。これからますます縄文人の研究、人間としての縄文人の研究をお進めになると思うのですが、そういうような研究を見習うためにも、ぜひ小林縄文学の精髄をそれぞれの論文から汲み取っていただければ大変ありがたいし、また今日お話しいただいた意味もあるのではないかと思います。

時間が迫っておりますので、最後に一言申し上げたいと思いますが、かつて小林先生はＥ・Ｓ・モースの業績を踏まえ、縄文研究の開基はモースで、開祖は山内清男だとお書きになっています。私は縄文人研究の開基は山内清男先生で、開祖は小林達雄先生だと思います。今後、小林縄文学を踏まえたうえで、若い人たちが大いに研究を進めていただければと思います。また、こういう機会に普段あまり聞き慣れないような内容をお話いただいた小林先生に御礼を申し上げまして、まとめの言葉としたいと思います。どうもありがとうございました。

編集後記

原稿を公募した紀要第２号には７編の投稿がありました。３月に開催し好評を博した特別講演会も関係者の協力を得て誌上再録することができました。紀要第３号からは論考も掲載する予定です。本紀要が埋蔵文化財調査士・士補の「調査力」を広く開示する場となることを願いつつ‥‥。（N）